# ラサ戦記

志鷺辰駆@紅茶えす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラサ戦記

【Ｎコード】

Ｎ５８６０Ｓ

【作者名】

志鷺辰駆@紅茶えす

【あらすじ】

「もっと、ぎゅってして」彼女を抱きしめる。甘いキス。「大好きだよ・・・」

アイザス王国とベルグ帝国の戦争の中で、主人公ラサの恋愛と別れ、戦争と死を描きます。

２００８年３月～４月ミク日記連載したものを加筆修正しています

# ラサ戦記１　新天地（前書き）

ラサ戦記０　遠い記憶

「もっと、ぎゅってして」
彼女を抱きしめる
甘いキス
「ん、きもちいい・・・・だーいすきっ」
「大好きだよ・・・・」
オレは、こんな日々がずっと続くと信じていたんだ
それは遠い記憶

# ラサ戦記１　新天地

ラサ、それがオレの名だ
黒髪に黒瞳、服装と鎧は赤を基調としている
少しは名の知れた剣兵で、故郷で勃発した戦乱では、
相棒の魔兵エフィと共に、戦乱終結に一役買ったと自負している
だが、兵士であるオレ達にとって、
平和というのは束の間の休息でしかなかった
やがて、平和に退屈するようになったオレは、
隣国で戦争が起こったという噂を耳にした
「ここで燻っていても仕方ない、一緒に隣国へ行かないか？」
オレ達は新天地を求め、船で隣国へと渡った

港に着いたオレ達の目に飛び込んできたのは、
義勇軍を募る告知だった

・同盟であったベルグ帝国が裏切り、
奇襲を受けた我らがアイザス王国を救うべく、
義勇軍をここに募集する
・愛国心溢れる者、腕に覚えのある傭兵、
平和を願う若者達よ集え

「渡りに船とはこの事だな」
「待遇も・・・悪くはなさそうね」

## ラサ戦記１　新天地（後書き）

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

エフィ：魔兵　２０代後半
イメージカラー：黒髪＋緑
ラサの長年の相棒

## ラサ戦記２　義勇軍

故郷での戦果が評価されたのか、
オレは義勇軍で小隊の指揮官に抜擢される事になった
副官はもちろん、相棒のエフィだ

アイザス王国軍は、ベルグ帝国軍の奇襲によって、
その大部分を失い、籠城戦に追い込まれていた
義勇軍は鬨の声を上げ、
アイザス城正門のベルグ帝国軍を背後から強襲を敢行した
「敵が浮き足立っている今が勝機だ！」
練度の低い義勇兵を鼓舞し、先陣を切る
オレの配下についた１２名のうち、
１０名を引き連れての突撃
「エフィ！　援護を頼むぜ！」
２名をエフィの護衛に残している

敵の後陣、こちらから見れば最前線に
エフィの火炎魔法が炸裂し、さらに混乱する帝国兵
籠城しているアイザス王国軍との挟撃作戦
訓練された帝国兵と渡り合うにはこれしかない
オレ達に続いて、義勇軍が次々と突撃を仕掛ける

「援軍が来たぞー！」
防戦一方だったアイザス王国軍も、
ここぞとばかりに反撃に出た

「アンタが帝国軍の司令官かい？」
後陣を破り、帝国軍本陣へと切り込んだオレが対峙したのは、

「いかにも。義勇兵如きに背後を取られたのは不覚であったが、
私が手ずから蹴散らしてくれるわ！」
ハルバードを構える司令官
「見栄の割には・・・」
一気に懐へと踏み込み、抜刀一閃！
「大したこと無いな」
「それは・・・異国の剣・・・貴様、ただの義勇兵ではないな・・・、
名を聞こうか・・・」
オレの奥義・瞬剣流星斬を浴びて、くずおれる司令官
「ラサ、それがオレの名だ・・・！」
初撃から切り札を惜しみなく使っていく奇襲
長期戦に持ち込まれ、体勢を立て直されては、
義勇軍が蹴散らされるのは時間の問題だったのだ
そして、愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』の血を振り払う

「帝国司令官！　討ち取ったぞ！」
司令官の首を掲げる
「司令官が・・・？　て、撤退だー！」
本陣中央を分断される形になった帝国軍は、
次々と敗走していった

オレの配下は戦死2名、重傷5名
数倍する本陣に切り込んだ割に、被害は少なくて済んだが・・・、
戦死者の出ない戦争などない
義勇軍は、約半数が戦死もしくは重傷を負った
帝国軍は、その数倍の被害が出ているだろう

「危急存亡の秋に駆けつけてくれた義勇軍には感謝している
相応の待遇を持って応えよう」
アイザス王自らの労いを受ける義勇軍

「帝国司令官を討ち取りし、異国の剣兵ラサ、並びに魔兵エフィよ
ラサには、重傷を負った義勇軍隊長に代わり、司令官として、
エフィには、その副官として仕えてもらいたいが、どうか？」
アイザス王の申し出に、エフィと目配せをする
「「謹んでお受けいたします」」
片膝をつき、臣下の礼をとる二人
「では、義勇軍司令官ラサに命ずる
敗走した帝国軍を追撃せよ！」
「お任せ下さい」
「一部ではあるが、王国兵を義勇軍に編入させよう
働きに期待しておるぞ！」
「「「「おおおーっ！」」」」
国王の勅命に、さらに士気の上がる義勇軍

「国王・・・姫のことは」
「うむ・・・」
宰相の耳打ちに若干顔をしかめる国王
ふと、妙案を思いついた顔になる
「ラサよ、もうひとつ頼みがある
近郊の村へと落ち延びさせた愛娘リームを迎えに行ってはもらえぬだろうか？」
「は・・・？　ご命令とあれば」
「その・・・姫はいわゆる・・・」
何か言いかけて口をつぐむ宰相
「頼むぞ」
何やら半分脅しをかけるような満面の笑みで
国王は念を押したのだった

軍資金と褒美を受け取った
「やったわね♪」

報酬はエフィと折半、これがオレ達のやり方だ

## ラサ戦記２　義勇軍（後書き）

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

エフィ：魔兵　２０代後半
イメージカラー：黒髪＋緑
ラサの長年の相棒

## ラサ戦記3　アイザスの姫

国王の頼みを聞き入れ、近郊の村へと立ち寄った
「我々は王命を受けたアイザス義勇軍の者だ
ここに匿われているリーム姫様をお迎えにきた」
オレは王印の押された証明書を村長に見せた
「これはこれは、首を長くして・・・いや、コホン」
咳払いをし、妙な態度の村長
「して、姫君はいずこに？」
一国の姫と言えば、世の男性の憧れの的だ
興味が湧かないわけがない
「鼻の下が伸びてるわよ？」
エフィに肘でつつかれる
「え・・・！？」
「男ってのは、どうしてこうなのかしらね・・・」
居住まいを正すオレに、エフィが呆れたように呟く
「姫様でしたら・・・」
「ようやくお迎えが来たようね！」
村長の言葉を遮るように、甲高いが上品な声が、
なぜか上空から聞こえてきた
声に釣られて見上げたオレとエフィは、
あんぐりと口を開けたまま固まった
「貴方が義勇軍の英雄さんね？　噂は聞いてるわ」
上空には・・・美しい姫君が浮かんでいた
・・・飛竜に跨って！
「ラサ隊長は、異国の方でしたね・・・知らないのも無理はない」
呟いた兵士をキッと睨む姫君
「あら、アイザスの戦姫リームという名も
まだまだ知られていなかったようね？」

見事に飛竜を操り、優雅に着地するリーム姫
「さあ、帝国軍を追撃するんでしょ？
よろしくね、英雄さん♪」
そう言って握手を求めるリーム姫
「いや、姫を城へ護送する部隊は手配済み・・・・」
「なによ、わたくしを追い返すつもり？
そもそも、王国唯一の竜飛兵であるわたくしを
お父様が戦わせてくれないから、こんな事になったのよ！
国を守るのは王族の責務、違って？」
捲し立てるリーム姫
「そうかもしれんが、アンタ、一国の姫君だろ・・・・？
オレ達は戦争をしてるんだぜ！？」
「あら、男女差別？　貴方の副官も女性よね」
「そういう問題じゃ・・・・」
「心配しなくても、戦場で血筋を振りかざして、
貴方の隊長権限を侵害したりしないわ
戦場では・・・・ね？」
頑なな決意
そして、首を横に振らせない、王族特有の威圧感・・・・
あの王にして、この姫有りか・・・・
アイザス王の満面の笑みを思い出す
こうなる事を分かってやがったんだ！
その上で姫をオレに任せ、傷でもつけようものなら、
命は無い・・・・と、あれはそういう含みだったのか！

しばし、目を伏せていたオレを、
瞬き一つせず見つめ続けるリーム姫
「わかった、リーム姫の従軍を許可する
ただし、戦場ではオレの指揮に従ってもらう・・・・」
「ありがとう！」

そう言って、リーム姫はオレに抱きついた！？
「お、おい！」
エフィと義勇兵達が目を丸くする
編入された王国兵の中には、
剣に手をかけている者までいるじゃないか！
「貴方、名前は？」
抱きついたまま、尋ねるリーム姫
「ラサ・・・それがオレの名だ」
「ではラサ、貴方にアイザスの姫として、
最初で最後の命令をします！
わたくしの事はリームと呼びなさい
姫なんて呼んでも口聞いてあげないんだから！」
「わ、わかったリームひ・・・いや、リーム」
ようやくオレを放し、にっこり笑うと、
「ラサ、しっかり守ってね♪」
オレの両手を両手で包み、リームはウインクしたのだった
って、空を飛ぶ竜飛兵を剣兵のオレがどうやって守るんだ・・・？

「とんだじゃじゃ馬を背負い込んだものね・・・？」
皮肉を耳打ちするエフィ
全く同感だぜ・・・

## ラサ戦記３　アイザスの姫（後書き）

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

エフィ：魔兵　２０代後半
イメージカラー：黒髪＋緑
ラサの長年の相棒

リーム：飛兵　２０代前半
イメージカラー：金髪＋紫
アイザスの姫

## ラサ戦記４　追撃

アイザスの姫リームを加えた義勇軍は、さらに士気を高め、
攻城戦で敗走したベルグ帝国軍の残党追撃を開始した
「情報によれば、帝国からの援軍が国境を越えたそうだ
ここで敗残兵との合流を許すわけにはいかない
強行軍になるが、この渓谷を回り込み・・・」
簡易司令室のテントに副官エフィ、各小隊長、
リームを集め、作戦方針を相談する
「渓谷越えなら、早速わたくしの出番ですわね♪」
目をキラキラさせるリームに、
「ああ・・・そういうことになる
だがリーム一騎で戦闘を仕掛けるのは無謀だ
あくまで、偵察と陽動がリームの任務、
本隊と合流するまで、戦闘行為は禁止する」
オレは釘を刺しておいた
「はーい♪」

断崖に挟まれた渓谷に、帝国敗残兵が集結しつつあった
兵数こそ義勇軍より多いが、負傷兵を差し引けば、
戦力比は互角、士気は圧倒的にこちらが高い
作戦通り、リームが単独で先行する
「り、竜飛兵が・・・！　敵襲ーっ！」
浮き足立つ帝国兵
大半の兵士が逃亡を始める
だが、リーム単独と見るや
「ええい、敵はたかが一騎！　恐れるな！」
撃墜を指示する帝国指揮官
だが、指揮系統はめちゃくちゃだ

「あはははは！　撃ち落とせるものならやってみなさい！」
高笑いを上げ、さらに挑発するリーム
「撃てーっ！」
槍兵隊を壁に、弓兵隊が矢を射掛けてくる！
「あの飛兵・・・噂に聞くアイザスの姫じゃないのか？」
「討ち取れば褒賞モノだぞ！」
「あの方達、目が危ないですわ・・・」
後方へと退却するリームを執拗に追撃する帝国軍

リームが渓谷出口に差し掛かる頃、
「弓兵隊！　撃てーっ！」
断崖上部に伏せさせた義勇軍弓兵隊が、
リームを追撃してきた帝国軍に両側から矢の雨を降らせる！
「ふ、伏兵だと！？」
「陸戦部隊！　突撃！」
渓谷の出口を塞ぐように陸戦部隊を展開、
混乱した帝国軍に、オレは先陣を切って突撃を仕掛けた
「ラサごめん、バレちゃった☆」
「リーム！　気を抜くな！」
金に目の眩んだ一部の帝国兵が執拗にリームを狙っていたのだ
・・・！！
間一髪、オレの放った剣気がリームに襲いかかる矢を撃ち落とす
「ぁっ・・・！　ありがと～♪」
「あとは任せろ・・・飛剣真空斬！」
先ほど放った剣気をもう一撃、今度は射手を倒す
「ふふ、なかなかやるじゃない」
「褒めても何も出ないぞ、オレから離れるなよ？」
まったく、守りにくい事この上無いぜ・・・

伏兵の出現で劣勢になった帝国軍は、

「「「に、逃げろー！」」」
そこで爆音が響く
転進した帝国兵がみたものは
帝国本隊から立ちのぼる炎と煙だった
エフィ隊を迂回先行させ、退路の遮断と、
攻撃魔法による本隊への奇襲をさせたのだ
その後、束の間の抵抗を見せた帝国軍だが、
「我々はアイザス義勇軍である！
早々に降伏するならば、捕虜としての正当な扱いを約束する！」
こちらの降伏勧告に、すぐに応じたのだった

戦勝を祝う義勇軍
いつものように振り返ると、エフィの様子がおかしい
「どうしたエフィ・・・？」
声をかけた途端、オレの胸に飛び込んできた・・・！？
「「「ラサ隊長！　見せつけてくれますね！」」」
冷やかす兵士達
いや、違う・・・
「ハァ・・・ハァ・・・」
倒れ込んできたのだ！
高熱を感じさせる荒い息づかい・・・
「・・・衛生兵！」
オレは慌ててエフィを抱き上げ、衛生兵を召集したのだった

## ラサ戦記４　追撃（後書き）

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

エフィ：魔兵　２０代後半
イメージカラー：黒髪＋緑
ラサの長年の相棒

リーム：飛兵　２０代前半
イメージカラー：金髪＋紫
アイザスの姫

## ラサ戦記5　迎撃

強行軍が祟ったのか、熱病に倒れたエフィを休ませた
「無理をさせてしまったな、すまない」
エフィの手を握り、そう声をかける
「ごめんね・・・帝国軍が迫っているのに・・・」
エフィの容態は少し落ち着いたようだが、とても戦闘できる状態ではない
「安心して眠っていていいぜ」
「ありがとう・・・」
そう言ってエフィは目を閉じた

簡易司令室に、リームと各小隊長を集めての作戦会議
「この渓谷前方の地形を活かして布陣する」
そして、前回戦功を上げた、
両翼の弓兵隊指揮官のチャオとランテを
副司令官代理として任命することになった
「はーい♪」
「後方支援なら任せてね☆」
やや軽めの軍礼だが、堅いことは不要だろう
二人とも女性ながら、弓の腕には目を見張るものがある
チャオは傭兵、ランテは狩人として生計を立ててきたそうだ
「伝令！　帝国軍接近中！　数刻後に交戦すると思われます！」
「総員戦闘配置！　帝国軍を迎撃する！」
渓谷を背にし、前面に槍兵隊、中央に本陣、本陣後方に弓兵隊を配置する
帝国軍は、約2倍の戦力だが、地の利はこちらにある

数刻後、伝令通り帝国軍が姿を見せた

「帝国騎兵隊の突撃が来るぞ！　槍兵隊整列！　一歩も通すな！」
騎兵突撃を止めるのは槍兵整列というのが兵法の基本だ
更に、激突前に弓兵隊が矢を射掛け、戦力を削ぐ
それでも戦力差は否めない
帝国側もこちらの前線に対し、矢を射掛けてくる
所々突破してくる帝国騎兵
「本陣剣兵隊は、突破してきた騎兵を包囲！　各個撃破！」
オレ自身も本陣の先頭に立つ
「リームは上空から本陣の支援を！　弓に気を付けろよ！」
「任せなさい☆」

激しい攻防が、やがて消耗戦を呼ぶ
「…頃合いだな」
このままでは兵力差で押し切られてしまう
「本陣で中央突破！　リーム、ランテ、チャオも続け！」
「「「りょうかーい♪」」」
中央に戦力を集中させ、
温存していた騎兵隊を前面に出して帝国本陣に強襲をかける！

だが、作戦通りに事が運ぶほど、帝国軍も甘くはなかった
「な、なんだあれは…！！」
上空に出現した巨大な隕石が前線に落下する
「ばかな！　自軍を巻き込んでの大魔法だと！」
前面に出した騎兵隊は、帝国本陣の前衛部隊と共に消滅した
「フハハハ！　我が名は帝国魔兵長ゲボルグ！
アイザスの義勇軍ごときが、ずいぶんと調子に乗ったようだな」
義勇軍に動揺が走り、士気の低下を招く
「リーム！　オレを飛ばしてくれ！　早く！」
オレの意図を察したリームが滑空してくる
「わたくしを連れてきて良かったでしょう？」

飛竜の脚を掴み、ゲボルグの元へと飛ぶ
「うまくすり抜けてくれよ！」
行く手を阻もうとする帝国飛兵は、
チャオとランテが撃ち落としてくれていた

ここでもう一発喰らったら、義勇軍は瓦解する
だが大魔法というのは、早々連発できるものではない
「何をやっている！　しっかり守らぬか！」
魔法の詠唱を中断し、帝国兵を盾にするゲボルグ
「逃がすかよ！」
飛竜から飛び降り、帝国兵を切り伏せ、ゲボルグへと肉迫する！
「若造が！」
「・・・・くっ！」
ゲボルグの放った魔法の矢が肩口に命中するが
止まるわけには行かない！
オレは『深紅の風クリムゾンウインド』を鞘に収めつつ、疾駆する！
「奥義・・・瞬剣流星斬！」
踏み込んで抜刀一閃！
「ぐあぁぁぁっ！　き、貴様・・・・！」
大きく切り裂かれるゲボルグだが、絶命には至らない
肩口の傷が、オレの剣を鈍らせたのだ
だがオレは、間髪入れずに追撃を繰り出している！
「我が輩にこれほどの傷を負わせるとは、何者だ・・・・？」
だが、オレの放ったトドメの一撃が空を斬っていた
ゲボルグの姿がかき消えていたのだ
瞬間移動テレポートか・・・・！
「今回の所は退いてやる、名を聞いておこうか」
どこからともなく、ゲボルグの声が響く、これも魔法か・・・・
「アイザス義勇軍司令官ラサ、それがオレの名だ・・・・！」

「ラサ・・・・忘れんぞ・・・・！」

撤退する帝国軍だが、こちらにも追撃する余力はなかった

「本国に伝令を・・・・帝国軍は撤退、国境の警備を頼むと」

伝令兵に指示を出す

「ラサ、無理しないで。ひどい傷だわ」

「ありがとう、指示が終わったら休ませてもらうよ」

心配そうにオレ手当てをするリームに笑顔を見せる

こうして義勇軍は、戦死・重傷が半数以上という

被害を出したが、辛うじて帝国軍の撃退に成功したのだった

## ラサ戦記５　迎撃（後書き）

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

エフィ：魔兵　２０代後半
イメージカラー：黒髪＋緑
ラサの長年の相棒

リーム：飛兵　２０代前半
イメージカラー：金髪＋紫
アイザスの姫

ランテ：弓兵　２０代半ば
狩人。義勇軍の戦友

チャオ：弓兵　２０代前半
イメージカラー：茶髪＋青
傭兵。義勇軍の戦友

ゲボルグ：魔兵　年齢不詳
イメージカラー：赤髪＋黒
ベルグ帝国魔兵長・ラサ最大の敵

# ラサ戦記６　凱旋

戦後指示を終えて、ようやく休息を取る事が出来た
「ラサも、これで任務達成よね」
「そうだな」
傷の手当てを受けた後も、暫く安静が必要なオレに、リームは熱心に世話を焼いてくれている
今は二人きりだ
オレは安静の身だがな
「城に戻れば、しっかりとした恩賞が出るとは思うけど・・・・その前に・・・・その・・・・」
「どうした？　歯切れが悪いな」
「わたくしからも・・・・褒美を取らせて差し上げますわ・・・・」
「それは光栄だな」
ベッドから半身を起こしたオレを、じっとみつめるリーム
「わ、わたくしと・・・・こ、婚約なさい！」
突然の求婚、呆気にとられるオレ
「き、救国の英雄には、当然の権利ですわ！
そうすれば・・・・凱旋にも箔が付くというものですし・・・・」
いつもの調子でまくしたてようとして、尻窄みになるが、それでも視線は外さないリーム
・・・・
暫しの沈黙
「・・・・嬉しいよ」
オレの言葉に、表情を明るくするリーム
「一国の、こんなにも美しい姫君の求婚を受けるとは、本当に光栄の至りだ」
「ほ、褒めても何も出ませんわよ？」
真剣に言葉を選ぶオレに、少し安堵したのか、

以前オレの言った台詞を返してくるリーム
「だが、すまない・・・
オレには心に決めた人がいるんだ」
・・・
再び沈黙
瞳が潤むのが分かる
「いずれは一国の主になれる二度とない機会をあげましたのに、きっと後悔しますわよ・・・」
「そうだな・・・」
苦笑するオレに抱きつき、口づけをするリーム
そして、すぐに身を翻す
キラキラとした雫が飛び散る
「それはアイザスを救った英雄への褒美です！
今のは国のことを、政治のことを考えての申し出
べ、別に好きとかそういうのじゃないんだから・・・！」
そのまま振り返ることなく、足早にリームは立ち去った

翌日、オレの安静が解け、アイザス城への凱旋
帝国軍を退けた義勇軍は、アイザスの民に暖かく迎えられた
「義勇軍の働きには感謝している
望む者は、王国正規兵として取り立てよう
また、戦死者の遺族への恩賞も約束しよう」
登城した義勇軍を労うアイザス王
「そして、義勇軍司令官ラサよ」
「ハッ」
名指しで呼ばれ、片膝をつく
「そなたをアイザス将軍職として迎え入れよう」
「有り難き幸せ、粉骨砕身でアイザスに仕えます」

多額の褒美を受け取ったオレは、

まだ体調の優れないエフィの見舞いへ向かった
「出世したそうね、おめでとう」
「ああ、エフィの元にも辞令が来るはずだぜ」
オレは見舞いの花束を花瓶に移しながらそう答えた
報酬もいつも通りの折半だ
「まだ調子悪いようだから、無理はしないようにな」
「ええ、そうさせてもらうわ。貴方の傷はもういいの？」
「ああ、ほぼ完治したぜ」
肩を回してみせる
「ところで、貴方がリーム姫の求婚を断ったって
噂を聞いたのだけど・・・」
「ん・・・噂になってるのか？」
「何を考えてるのか知らないけど、
噂が本当なら、随分と勿体ないことをしたわね」
「そうかもな・・・」
苦笑するオレに、エフィは笑顔を見せたのだった

## ラサ戦記６　凱旋（後書き）

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

エフィ：魔兵　２０代後半
イメージカラー：黒髪＋緑
ラサの長年の相棒

リーム：飛兵　２０代前半
イメージカラー：金髪＋紫
アイザスの姫

## ラサ戦記7　鉱山（前書き）

帝国軍を国境線まで追い払い、ひとまず戦況の安定したアイザス王国とベルグ帝国
アイザスの将軍となったオレは、軍の再編成や訓練を中心に活動していた
疲弊した戦力を立て直すのは急務だ

## ラサ戦記7　鉱山

軍務に追われる日々だが、休暇が無いわけではない
エフィを見舞いに行った後、オレは近くの公園に来ていた
草むらに大の字になって寝転がり、雲を眺める
そこは、アイザスでみつけたオレのオアシスだった
だが、
「ラサ将軍！　大変ですっ！」
束の間の静寂は、あっさり破られた
非番とは言え、将軍職ともなれば、所在くらいは部下に伝えておくものだ
「クロネ鉱山で崩落事故、
多数の鉱夫が巻き込まれたそうで、軍に救助要請が来ております！」
急を知らせる伝令に飛び起きる
「急ぎ、救助部隊を編成！　オレも向かう！」

クロネ鉱山は鉄鉱資源の採れるアイザスの領地
軍が多くの鉄を必要としているため、鉱夫が増員されている
出来る限りの早馬を用意し、救助部隊の第一陣となって出発
救助に必要となるであろう大がかりな装備は、第二陣に配備してある
「こんな時に飛兵隊が揃っていれば・・・」
アイザスに不足している戦力のひとつが飛兵だ
勿論、飛兵隊の編成は上奏してあるが、資金・指揮官とも揃っていない
今後も飛兵隊があれば、戦術の幅も広がるのだが、
指揮官を任せられる竜飛兵となると各国にもそう多くは無い
アイザスでは、姫であるリームしかいないというのが実情なのだ
そんな事を思案しつつ、先頭で早馬を飛ばしていると大きな影が

横切った
「わたくしの力が必要なのではなくて？」
「リーム！？　また城を抜け出してきたのか！」
「前にも言いましたけど、国を守るのは王族の責務ですわ！
ラサ一人くらいなら連れて飛べますけど、どうなさいますの？」
オレの考えを見透かしたように尋ねるリーム
「・・・・頼む」
一刻も早く現場を確認したい
現場での人員と装備の配置を考えておかねばならないのだ

リームと共に、一足先にクロネ鉱山へと到着
「救助部隊が向かっている、状況を詳しく教えてくれ」
「リーム姫様、ラサ将軍閣下、自ら来ていただけるとは有り難い」
現場責任者から直接状況を聞く
国の要求と鉱夫の増員により、新たに坑道を増やしての突貫作業が仇となったようだ
事故の規模が大きい
残った鉱夫を総動員して救助を行っているが、完全に手が足りない状態であった

現在の状況が書き込まれた坑道の地図を見て、救助部隊の振り分けを即断即決
指示を終えてすぐ、オレ自身も救助に加わる
「おい、誰かそこを支えてくれ！」
「これでいいか？」
必死に救助作業をする鉱夫の声に従い、岩を支える
「はっ、ラサ将軍・・・・！？」
救助に加わっていた兵士が素っ頓狂な声を上げる
「この状況で、役職など関係ないさ
救助部隊にも坑内では鉱夫の指示に従うよう言ってある

ここでの知識はアンタ達の方が上だ」
「有り難い・・・が、ここはこのままじゃラチがあかん・・・」
「どういうことだ？」
「このデカイ岩盤がよぉ・・・・くっ！
向こうには何人か取り残されてるんだが・・・
あまり時間がかかると、閉じこめられた向こうでは、息ができなくなるんだ・・・！」
経験則による知識だろう
「ふむ・・・、下敷きになった者は？」
「それはいないそうだが・・・」
岩盤に耳を当ててノックし、向こう側との意思疎通をする鉱夫
モールス信号というヤツだろうか
「向こう側に、なるべく岩盤から離れるよう伝えてくれ」
「・・・伝えやした」
「全員離れろ」
「剣なんかで、何をなさるんで！？」
愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』を構えたオレに、鉱夫や兵士が口々に尋ねる
オレは答えず、剣気を練り上げる
気迫を感じた鉱夫と兵士が指示通り少し離れる
「ハッ・・・飛剣真空斬！」
オレの放った剣気によって、坑道を塞いでいた岩盤を真っ二つにする亀裂が入る
そして次の瞬間、砕け散った
「「「すげぇ・・・」」」
見守っていた一同が声を漏らす
「はっ、火の元に注意！　粉塵爆発を起こすなよ！」
鉱夫の声が響く
そして、粉塵が納まるに連れ、人影が見えてきた
「助かった・・・の？」

その声の主と目が合う
「全員無事か？」
粉塵が納まると、声の主は、何ともこの場に似つかわしくない姿を見せた
ツルハシを持った、まだティーンと思える少女
「うん、みんな無事だよ。貴方が助けてくれたの？」
「ん・・・ああ、もう大丈夫だ
救助部隊の誘導に従ってくれ」
「あは☆　ありがとう！」
少女の無垢な笑顔が印象に残った

そうして、救助作業が終わる頃には、夜明けを迎えていた
「ふぅ、任務完了ですわね」
一国の姫であるリームが、顔や服を泥だらけにしている
「リーム、少し話があるんだが」
「なんですの？　改まって」
「アイザス軍に飛兵隊を編成したいと考えているんだ」
「飛兵の偉大さがわかりましたのね♪」
「まあ・・・な
そこで、リームを飛兵隊の指揮官にと、上奏を考えているんだが・・・」
オレの言葉に表情を明るくするリーム
「リーム自身はどうか・・・と」
「是非もないですわ！
ラサを将軍に推した、わたくしの目に狂いは無かった。という事ですわね♪」

## ラサ戦記７　鉱山（後書き）

数日後の軍議で、リームは飛兵隊指揮官として任命されたのだった

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

リーム：飛兵　２０代前半
イメージカラー：金髪＋紫
アイザスの姫

ツルハシの少女：鉱員？　１０代後半
イメージカラー：茶髪＋ピンク
ラサが命の恩人

## ラサ戦記８　狩人（前書き）

オレはアイザス将軍として、打てる手を打ち、着々と軍備を調えていた

一方、ベルグ帝国側も軍備増強しているようだが、

アイザス方面を任されていた魔兵長ゲボルグの負傷により、今の所、侵攻の気配はない

ベルグ帝国は、ベルグ皇帝が一代にして築いたという軍事国家

優秀な人材も多いようだ

この地方で最大の軍事力を保持した所で、天下統一の覇道を唱えたベルグ皇帝は、

周辺諸国への侵攻を開始、電撃作戦で領土を拡大、アイザスとの同盟も破棄

そして、現在に至る・・・と

異国から渡ってきたオレは、報告書から知識を得ていた

## ラサ戦記８　狩人

少し時間ができたので、いつもの公園に向かう途中、
「ラサたーいちょ！」
後ろから声をかけられた
振り向くと、そこには義勇兵として共に戦った顔があった
「ランテじゃないか、久しいな」
「久しぶり～♪　ってほどでもないような？」
相棒のエフィが病に倒れた後、義勇軍副官に任命した弓兵のランテだ
ランテは正規兵にはならず、狩人に戻っているらしい
何とも惜しい人材だ
「あ、隊長じゃなくて将軍になったんだっけ、すごいねぇ～♪
やっぱ忙しいの？」
「まあ、それなりに。今はそうでもないがな」
「お。これから狩りに行くんだけど、良かったら一緒にどう？・・・・なんて」
「ふむ・・・面白そうだな」
「あは、決まり～♪
ラサたい・・・将軍は、弓って使える？」
「呼びやすいように呼んでくれて構わないぜ
弓は嗜み程度には使えるが・・・」
「じゃあ、ラサ隊長って呼ぼうかな～？
弓が使えるなら・・・」
そう言って耳元に顔を寄せるランテ
「とっときの狩り場を教えてあげちゃう☆」
周囲の目を気にするように耳打ちしたのだった
ランテの案内で森に入り、獣道を進む

「到着～♪」
「・・・なるほど」
樹木による隠蔽性があり、かつ周辺を見渡せる高地
獲物を狙撃するのに打ってつけの場所だ
「一発でわかるとは、頭いいね～♪
弓のセンスあるかもよ？」
「褒めても何もでないぞ」
「あは☆」

オレ達は、日が暮れるまで狩りを楽しんだ
小動物から、ちょっとした魔物まで、大猟の成果を上げるに至った
「手際がいいな」
「そりゃあプロだもの
はい、これラサ隊長の取り分ね♪」
食肉や毛皮の前加工をし、獲物を半分寄越してくるランテ
「いや、こんなに受け取れない
そうだな、今晩のオカズだけ貰う事にするよ」
実際、大半の獲物を狩ったのはランテだ
弓の腕は比べるべくもない
「今晩のオカズなんて・・・ラサ隊長のエッチ☆」
身をよじらせるランテ
「ちょ、待て。ちが・・・」
「ふふ、ちょっとからかっただけー
あ、でもこの場所は二人の秘密・・・ね？」
ペロっと舌を出すランテに、オレは苦笑交じりに頷いた
そして
「ランテ・・・無理を承知で訊くが・・・」
オレは真剣な面持ちで切り出した
「ん・・・なぁに？」
「アイザス軍に来ないか？」

「私が欲しいの・・・・？」
真剣な瞳で見つめ返してくるランテ
何だか違う意味を連想して、気恥ずかしい
「ああ、欲しい・・・・
ランテが必要なんだ」
「ふふ、ラサ隊長にそこまで言われちゃ、断れないなー
うん、いいよ☆」

## ラサ戦記８　狩人（後書き）

義勇軍で戦功のあるランテの入軍手続きは簡単だった
こうしてランテは、弓兵指揮官として、オレの元に配属されたのだった

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

ランテ：弓兵　２０代半ば
狩人。義勇軍の戦友

## ラサ戦記９－１　名医（前書き）

オレは、一向に体調の戻らないエフィを連れて、名医がいるという村を訪れていた

「何だか悪いわね、忙しいんでしょう？」

「時間くらい作ろうと思えば作れるさ」

## ラサ戦記９－１　名医

診察を受けてるエフィを待っていると、村がにわかに騒がしくなった
様子を見に外へ出ると、逃げ惑う人々が見える
「いったいどうしたんだ？」
「墓地からゾンビが・・・！」
「次々と・・・！」
「アンタ兵隊さんか！？　助けてくれ！」
村人達の悲鳴と懇願。オレは愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』に手をかけ、
「わかった、自警団と協力して村人を避難させろ！」
兵士の一人にそう指示する
わずかな手勢しか連れていないが、やるしかない！

墓地に着くと、すでにゾンビ共が村に侵入しようという所だった
「村を守るんだ！　行くぞ！」
村を囲う柵を利用して防衛線を敷く
「ふふふ、情報通りだな・・・」
ゾンビと交戦を開始した所で、声が響く
「この声は・・・ゲボルグ！？
このゾンビも貴様の差し金なのか！」
「いかにも・・・この傷の怨み・・・晴らさせてもらうぞ」
死霊魔術まで操るとは怖ろしいヤツだ
「そこか！」
今も墓地で、続々とゾンビを召喚するゲボルグを発見！

しかし、手勢が少なく、なかなか踏み込めない
次々とゾンビを斬り伏せるが、これでは召喚とのイタチゴッコだ

「くそ・・・キリがないぜ！」
そこへ、後方から飛来した火炎魔法がゾンビを焼き払った！
「エフィ！」
振り返ると、不調をおして魔法を使ったエフィが、片膝をついていた
「無理はするな！　後は任せろ！」
そう言い残して、墓地に踏み込む！
「加勢するわ！」
後方からの声と共に、暖かい光が辺りを包む
オレの傷が癒えると同時に、ゾンビが浄化されていく
これは・・・神聖魔法！？
さらに支援魔法がくる
エフィではない、男の魔兵と女の僧兵が援護してくれていた
「メイか・・・余計なことを・・・」
わずかにそう言い残して、ゲボルグが姿を消す
「え、いまの・・・？」
僧兵が呟く。だが、深く考えている余裕はない
「協力に感謝する！　ゾンビを掃討するぞ！」
「うん、まかせて☆」

## ラサ戦記９－１　名医（後書き）

召喚で増殖する事の無くなったゾンビは、徐々に数を減らしていく
協力者の存在も大きく、やがて全てを掃討するに至った
「おかげで助かった」
オレはそう言って、
「「あ！」」
二人の声がハモッた
その僧兵には見覚えがあったのだ

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

エフィ：魔兵　２０代後半
イメージカラー：黒髪＋緑
ラサの長年の相棒

加勢者１：僧兵　１０代後半
イメージカラー：茶髪＋ピンク

加勢者２：魔兵　２０代前半
ゾンビ掃討に加勢した二人組の男女
腕はなかなかのもの

## ラサ戦記９－２　冒険者

「キミは、鉱山の事故で・・・・」
「うん、助けてくれたよね♪」
その僧兵は鉱山で救出した少女だったのだ
「キミがこんなにも優秀な僧兵だとは思わなかったよ」
「僧兵じゃなくて、僧侶！　アタシ達、冒険者だもの☆」
「・・・知り合いなのか？」
割って入ったのは、もう一人の魔兵・・・いや魔法師だった
「うん、命の恩人なの☆
あ・・・名前は？　アタシはメイっていうの♪」
「ラサ、それがオレの名だ」
「ラサ・・・？　その異国の剣、アイザス将軍の！？」
魔法師の言葉に頷く
「これは失礼を・・・自分はマーティンといいます
以後、お見知り置きを」
と、挨拶をしている場合ではなかった
「無茶をなさってはいけません！」
倒れたエフィを抱え起こす医師
「エフィ！」
慌てて駆け寄り、肩を貸し、そのままお姫様抱っこの要領で抱き上げる
「その人、病気なの？」
「ああ。それで医師を訪ねて、この村へ来たんだ」

エフィを診察室へと運び、
「容態は？」
医師に尋ねる
「正直言って、あまり良いとは言えません

充分な安静と治療が必要です」
「そうか・・・あ」
ついてきてくれていたメイを見る
だがメイは首を横に振った
「神聖魔法で治せる類の病気じゃないわ」
となると、やはり医師に任せるしかない
「エフィを頼みます」
そう念を押して、診察室を後にした

「彼女、治ると良いね」
「ああ、ありがとう」
エフィを彼女と呼ばれて、少し嬉しい気持ちになる
「キミ達は冒険者だったな、軍からもささやかながら謝礼を出そう」
それが目的で加勢してくれたのでは無いだろうが、これは当然の報酬だ
「それと・・・だ、キミ達の腕を見込んで頼みがある
良かったらアイザス軍に来てみないか？
腕相応の待遇で迎えられると思うが・・・」
エフィが倒れている今、オレの配下には魔兵がいない
元より、僧兵も欠けている戦力のひとつだ
「有り難い申し出ですが・・・
自分は軍に所属するつもりはありません」
「アタシも気楽な冒険者の方が性に合ってるなー」
二人の返事は芳しいものではなかった
「そうか・・・残念だ。またどこかで会えるといいな」
そう言って背を向けようとすると、
「・・・でも、命の恩人の頼みだし、やってみよっかな？」
「メイ・・・！？」
渋い顔をするマーティン
「オレとしては有り難いが、いいのか？」

「うん☆　アタシを必要としてくれるなら♪」
「ありがとう…宜しく頼む！」
両手を包むようにして感謝を表現する
メイが頬を赤らめた気がしたのは、オレの自意識過剰だろうな

## ラサ戦記９－２　冒険者（後書き）

まだ幼さの残るメイを戦争に巻き込むのは気が引ける
しかし、優秀な僧兵を必要としているのは事実だ
「自分は冒険者を貫くが、仲間のためなら個人的には協力する
メイ、その時は呼んでくれ」
そう言い残して立ち去るマーティン
彼も魔兵としては惜しい人材だが、仕方が無い
「ありがとう、またねー☆」
オレの元に残ったメイは、手を振ってマーティンを見送った

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

エフィ：魔兵　２０代後半
イメージカラー：黒髪＋緑
ラサの長年の相棒

メイ：僧兵　１０代後半
イメージカラー：茶髪＋ピンク
ラサが命の恩人

マーティン：魔法師　２０代前半
ゾンビ掃討に加勢
アイザス軍所属を拒否し、冒険者を貫く

## ラサ戦記１０　帰郷（前書き）

療養中のエフィから手紙が届いた
『ラサへ
体調は一向に戻らず、今後も貴方の役に立つ事はできないと思います
アイザスの気候が合わないのかもしれません
明日の便で故郷へ帰ります
エフィより』
「・・・・！？」
慌てて日付を見ると、昨日になっている
てことは、今日の便じゃないか！
オレは慌てて司令室を飛び出し、早馬を飛ばして港へと向かった

## ラサ戦記１０　帰郷

「エフィ！！」
今まさに船に乗ろうというエフィを発見する
「ラサ・・・？　わざわざ見送りに来てくれたの？」
さも意外そうな顔のエフィ
「いきなりあんな手紙を寄越して・・・なぜなんだ！」
「なぜ？　理由は手紙に書いたわ」
「ずっと・・・二人でやってきたじゃないか」
「そうね。でも、もうここにいる理由がないわ」
「・・・！」
「見送りに来てくれてありがとう
アイザス将軍として頑張ってね」
絶句したオレを置いて、船に乗り込もうとするエフィ
「・・・待ってくれ」
「もうすぐ出航の時間よ」
「まだまだアイザスでやり残したことがあるじゃないか
オレの・・・そばにいてくれないか・・・？
戦況が落ち着いたら、指輪を用意しようと思っていたんだ」
エフィを引き留めたい一心で、初めてオレは想いを打ち明けた
「戦えない私がいても足手まとい
何のメリットも感じないわ」
ほのかな恋心を抱いていたオレと違い、エフィにとってオレは、
あくまで戦友だった
「どうしても行くのか？」
「ラサが私をそう想っていたくれた事は嬉しいわ
でも、私の気持ちは変わらない」
それ以上、引き留める術は持っていない
オレは帰郷するエフィを見送ることしかできなかった

## ラサ戦記１０　帰郷（後書き）

折しも、軍備を調えたベルグ帝国軍が、国境に集結していた
オレはアイザス将軍として、配下の指揮官達を召集し、副官不在のまま、国境へと布陣
心に開いた穴を埋めるように、オレは戦場を駆けていた

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

エフィ：魔兵　２０代後半
イメージカラー：黒髪＋緑
ラサの長年の相棒

## ラサ戦記１１－１　相談

アイザス軍は国境防衛戦で、無事ベルグ帝国軍を撃退し、アイザス城へと帰還した
「ラサさん、今いいかな・・・・？」
神妙な面持ちで話しかけてきたのはメイだった
「ん、どうかしたのか？」
戦果報告を書かなければならないが、メイの表情が気になる
「アタシ・・・・どうしたらいいのかな・・・・？」
「話しくらいなら聞くよ」
メイを司令室に通す
今は、他に誰もいない
席を勧め、紅茶を入れて、落ち着かせると、メイはぽつぽつと話し始めた
「あのね、彼が大切にしてくれないの・・・・」
彼というのは、マーティンではないらしい
オレの知らない人物のようだ
「なんかね、浮気してるみたいなの・・・・」
「ふむ・・・・」
メイが話しやすいように相槌を打ち、聞き手に回る
彼氏の至らない点や、浮気相手と目される女性の事など、大半は愚痴のような内容だった
「アタシなんか、いない方がいいのかな・・・・？」
「そんなこと言うもんじゃない
メイを必要としている人は、たくさんいるさ」
「ラサさんも・・・・？」
「もちろんさ」
少しだけ、メイの表情が明るくなる
「その彼に、今の想いを話してみたらどうだ？

しっかり話し合えば、何か変わるかもしれないぞ」
「うん・・・そうだね
ラサさんに聞いてもらって良かった。ありがとう」

翌日。再びメイが話しかけてきた
「あ、ラサさん」
「彼とは話せたかい？」
「うん・・・」
メイの表情は暗い
「彼は大切にしてるって言うけど、浮気してるし・・・」
どうやら、メイと彼氏の会話は平行線だったようだ
「アタシは、アタシだけを見てくれる人がいいの・・・」
「その気持ちは分かるよ」
恋人には自分だけを見ていて欲しい
それは誰もが思うことだろう
オレもエフィの何気ない行動に妬いた事もある
もっとも、片想いのまま、ふられてしまったから、
恋人気取りだったオレは道化だがな・・・
「どうしても分かり合えないなら、別れるというのも選択肢だと思うが・・・
その前に、もっとよく話し合った方がいい」
結局、恋愛らしい恋愛をしていないオレにできるアドバイスはこの程度だった

さらに翌日もメイはやってきた
「ラサさん、ちょっと気晴らしに付き合ってくれないかな？」
「ん・・・まあ、時間はあるな
オレで良ければ付き合おう」
どうやら、また彼との話し合いはうまく行かなかったようだ

メイに案内されるまま、城下町を出た
「ね、ここ綺麗でしょ？」
「ああ・・・アイザスにこんな場所があったんだな」
そこには海を見下ろせる景色が広がっていた
「アタシ、冒険者だからね、こういう所いろいろ知ってるのよ☆」
「なるほどな」
「ここから飛び降りちゃおっかな・・・アタシなんて・・・・」
「おいおい、物騒なことを言うなよ」
「だって・・・・」
そうしてまたメイの愚痴を聞き、オレは、それをなだめた
「少しは気晴らしになったか？」
「うん。ありがとう☆」
メイの笑顔が、炭鉱で見たときの笑顔と重なった

翌日もメイに付き合って別の場所へ行った
「別れたいなら別れてもいいってさ・・・・」
「そっか。どうするんだ・・・・？」
「んー・・・・」
そこへ人の気配がした
「メイ、こんな所で・・・・あ」
見知らぬ男だがピンときた
「邪魔をして悪かったな」
立ち去る男
「追いかけなくていいのか？　何か勘違いされたようだが・・・・」
「ん・・・うん、行ってくるね」

## ラサ戦記１１－１　相談（後書き）

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

メイ：僧兵　１０代後半
イメージカラー：茶髪＋ピンク
ラサが命の恩人

## ラサ戦記１１－２　副官

さらに翌日
メイが泣いていた
「このまま消えちゃいたい・・・・」
「そんな事言うなよ」
「だって・・・アタシは誰の一番にもなれない・・・・」
「・・・・！」
暫し絶句、オレは葛藤していた
エフィへの想いが消えたわけじゃない
でも・・・・
「オレが・・・・オレがいるさ」
「気休めはやめてよ・・・・！
ラサさんにとって、アタシは一番じゃない・・・・」
「もうとっくに・・・・メイが一番だよ」
オレはメイを抱きしめた
「ホントに・・・・？　信じてもいいの？」
「ああ、オレを信じろ」
いつしか、オレはメイの事を好きになっていた
他の誰よりも・・・・この心に嘘はない
「うん・・・・今ね、ドキドキしてる」
「オレもだよ・・・・」
オレの胸に耳を当てるメイ
「うん。ドキドキしてるの、聞こえるよ」
メイの抱き返す腕に力がこもる
「あのね・・・・ラサさんは・・・・あ、ラサさんって呼びにくいな・・・・うん、ラーさんって呼んでもいい？」
「ラーさん？　まあ、構わないぞ」
「ラーさん、優しいね・・・・

アタシもね、ラーさんのこと、一番好きになっちゃってた
アタシの事、必要だって言ってくれて・・・
炭鉱でも、この前の国境防衛の時も、いっぱい助けてくれたね」
「そうだったかな・・・？」
「うん、そうだよ・・・☆
これからずっと、アタシの事守ってね・・・？」
「もちろんさ・・・」
メイを強く抱きしめる
「嬉しい・・・♪　でも、この恋は秘密にしよ？」
「ん・・・どうして？」
「だって・・・妬まれるの怖いの・・・」
そう言えば、メイは彼氏の浮気相手の事をそんな風に言っていたな・・・
妬まれて、仲を邪魔されたのだと
「わかった」

それからオレは、次第にメイを過ごす時間が多くなっていった
メイの了解を得てから、もっともらしい理由をつけて、
オレは空席になっていた副官にメイを任命した
私情が無かったと言えば嘘になるが、
戦術面に置いても、唯一の僧兵であるメイを
副官として本陣に置く事に異論を唱える者はなかった
普段は、将軍と副官として振る舞い、人目を避けての逢い引き
そうして二人は絆を深めていった

## ラサ戦記１１－２　副官（後書き）

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

メイ：僧兵　１０代後半
イメージカラー：茶髪＋ピンク
ラサが命の恩人

## ラサ戦記１２　火竜

オレは傭兵ギルドに来ていた
軍隊と言っても、全てが正規兵で構成されているわけではない
傭兵の雇用もアイザス将軍としての仕事のひとつだ
「あら、ラサちゃんじゃない？」
突然、ちゃんづけで呼ばれ、ぎょっとなって振り向く
聞き覚えのある声だが・・・
「チャオじゃないか。驚いたよ」
そこにいたのは、義勇軍として共に戦った弓兵だった
チャオは正規軍には入らず、気ままな傭兵を続けていた
「ねね。今、暇？」
「傭兵の雇用手続きが終われば、今日の仕事は終わりだが・・・？」
「良かったら、手伝って欲しい仕事があるの」
「仕事・・・？」
「うん。火竜討伐なんだけど、みんなビビッちゃって・・・
前衛が足りないのよ」
「火竜だと・・・軍に討伐要請は来ていなかったが？」
「先に傭兵ギルドに話が来たみたい」
「ふむ・・・」
要請もなく軍は動かせないが、個人的に参加することは可能だ
「ラサちゃんなら腕も信頼できるし・・・ね、おねがい☆」
チャオに渡された依頼書に目を通す
「近いな・・・」
まだ特に被害は出ていないが、野放しにはできない場所だ
行くなら、メイも連れていきたい所だな・・・
火竜が相手となれば、神聖魔法も使えるメイがいれば心強い
個人的に一緒に何かを成し遂げたいという感情もある・・・
だが、残念ながらメイは不在だ

元冒険者であるメイは、時々不在になることがある
メイにはメイの交友関係もあるだろう
夜には逢えると言っていたし、この件も日帰りで片付く距離だ
「わかった、手伝おう」
「ありがと～♪」

傭兵ギルドでも選りすぐりの少数精鋭で、オレ達は火竜討伐に向かった
到着した傭兵隊が見たのは、すでに洞窟で巣作りを始めている火竜だった
「こんな所に棲みつかれては周辺の驚異になるな・・・・」
「その通りだ。諸君、準備はいいか？」
彼は今回の指揮をとる傭兵隊長だ
「ラサ将軍も、今回は将軍という立場を忘れて、私の指揮に従ってもらいたい」
「元よりそのつもりさ」
作戦は定石通り兵種で前衛と後衛を分けての一斉攻撃だ
「行くぞ・・・・！」

さすがは傭兵ギルドの精鋭だ
最強の魔物と言われる火竜と見事に戦っている
傭兵隊長の指揮も的確だ
オレは密かに、彼の雇用を考えていた
「まずい、降下攻撃が来るぞ！」
火竜が洞窟の天井ギリギリまで飛翔したのを見て、オレは声をあげた
「総員防御隊形！　後衛を守るんだ！」
整列し、降下攻撃に備える
「ＧＵｏｏｏｏッ！」
「「「ぐあぁぁぁっ！！！」」」

「くっ・・・！」
オレも弾き飛ばされ、洞窟の壁に激突した
意識が飛びかけるが、なんとか持ち直す
受けた盾がひん曲がってやがるぜ・・・
降下攻撃『ランディングアタック』は、
巨体を活かして全体重を浴びせてくるという火竜の最強攻撃のひとつだ
受けきれるはずがなかったのだ
ここまで完璧に近い評価の傭兵隊長の唯一の失策だった
見渡すと前衛の大半が、重傷もしくは戦死していた
「Ｆｕｕｕｕｕッ！」
大きく息を吸い込む火竜！
降下攻撃と並ぶ最強攻撃の双璧、灼熱の『ドラゴンブレス』か！
司令が来ない・・・傭兵隊長も戦死したのか・・・！？
オレは後衛の前に走り込んだ
Ｂｕｏｏｏｏｏｏｏｏッ！！
「間に合え・・・飛剣真空斬！」
ブレスと同時に剣気を放つ！
剣気は炎を切り裂き、火竜にダメージを与えるが、致命傷には至らない
切り裂かれた炎も、威力の全てを消し去る事はできず、後衛の大半を薙ぎ払っていた
！！！
剣気によって切り裂かれた傷口に、閃光のような矢が突き刺さる！
「ＧＡａａａッ！」
悲鳴を上げる火竜
「ラサちゃん！」
「チャオ！　あそこに攻撃を集中するぞ！」
オレ達は、辛うじて火竜を倒すことに成功した

「二人だけになっちゃったね・・・・」
チャオが呟く
「みんなよく戦ったさ・・・・」
オレとチャオを残して、傭兵部隊は全員戦死していた
「みんなぁ・・・・」
オレに寄りかかり、涙を流すチャオ
そして顔を埋め、泣きじゃくった
オレは、じっと黙って、髪を撫でてやることしかできなかった
「チャオね、これからどうしたらいいのかな・・・・？」
「もし良かったら・・・・アイザス軍に来ないか？
無理にとは言わないが、気が向いたらいつでも・・・・」
戦友を失い、途方に暮れるチャオにかけてやれる言葉は、
それだけしか思いつかなかった
「うん・・・・」

## ラサ戦記１２　火竜（後書き）

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

チャオ：弓兵　２０代前半
イメージカラー：茶髪＋青
傭兵。義勇軍の戦友

## ラサ戦記１３　嫉妬（前書き）

火竜討伐の翌日
「ラサちゃーん、来たよ～♪」
意外なほど元気な声で、司令室にチャオがやってきた
ランテの時と同じく、義勇軍で戦功のあるチャオの入軍手続きは簡単だった

## ラサ戦記１３　嫉妬

今日の軍務を終え、一息つく
今のオレにとって一番幸せな時間帯
メイがやってくる時間だ
「あの人誰・・・？　なんかラーさんに馴れ馴れしいね」
メイの声は不機嫌そうだ
「チャオのことか・・・？　義勇軍時代の戦友だよ」
「ふーん。ラーさんの周りって女の人ばっかりだし」
そう言って、そっぽを向くメイ
「そうでもないと思うが・・・」
確かに、配下に女性の指揮官は多い
念のため断っておくが、
特に語られてはいないだけで、オレも普通に男の戦友の方が多いのだ
その彼らと過ごすのもオレには大切な時間だ
「アタシだけを見て・・・一番じゃなきゃ嫌なの・・・」
「メイだけを見てるさ・・・一番大切にしてるじゃないか」
抱きしめようとするオレの腕をすり抜けるメイ
「なんか嫌・・・こんな事言う自分も・・・。今日は帰るね」
足早に立ち去るメイ
オレの心には寂しさだけが残った・・・

あまり眠れないまま、翌日を迎える
オレは朝一でメイに会いに行った
「メイ・・・」
「あ・・・ラーさん、来てくれたんだ」
頷くオレに、少しだけ笑顔になるメイ
「昨日はゴメンね・・・」
そう言って身を寄せてくるメイ

優しく抱き留める
「優しいラーさんは大好きだけど、
他の女の人に優しくするラーさんは見たくないの・・・・」
「わかった、気を付ける」
「もっと、ぎゅってして」
メイを抱きしめる
甘いキス
「ん、きもちいい・・・・だーいすきっ」
「大好きだよ・・・・」
この時間がずっと続けばいい
オレは心からそう思った

## ラサ戦記１３　嫉妬（後書き）

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

メイ：僧兵　１０代後半
イメージカラー：茶髪＋ピンク
ラサが命の恩人

チャオ：弓兵　２０代前半
イメージカラー：茶髪＋青
傭兵。義勇軍の戦友

## ラサ戦記１４　疑惑（前書き）

秘密の恋と言っても、目ざとい者は気付き始めている
アイザス城内でも噂されているようだ
冷やかされることも、しばしばあった
オレは満更でもないという風に、悪い気はしていなかった

## ラサ戦記１４　疑惑

軍務が終わり、一番幸せな時間帯がやってくる
だが、今日のメイはまた不機嫌になっていた
「アタシ、あのお姫様嫌い・・・・」
「急にどうしたんだ？」
「急じゃないよ、ずっと思ってたもの・・・・
何かとラーさんにくっついてくるし、
ラーさんも、相手がお姫様だからって、何でもわがまま聞いて、
いっつもデレデレしちゃって・・・・」
「普通に接しているだけだが・・・・？」
思い当たる節が無いわけでもないが、
メイと他者への対応はきっちり分けているつもりだ
「ラーさん誰にでも優しすぎるよ、前にも嫌って言ったのに・・・・
アタシとラーさん仲イイから、邪魔しようとしてるのよ」
「考えすぎだろう・・・・？」
「そんなことない・・・・このままじゃ、きっと壊されちゃうよ・・・・」
「ふむ・・・・ちゃんと考えてみるから、機嫌直してくれないか？」
「ん・・・・今日はダメ・・・・。帰るね」
最近気付いた事だが、メイは気性が激しい
一度不機嫌になると、どんなになだめても、その日はまず機嫌が
戻らない
逆に、翌日になれば、割と上機嫌になっていたりする
そうと分かっていても、オレは眠れなかった

オレはメイに言われた事を気にして、少しずつ、周囲の女性達を
遠ざけていった
孤立していくのを感じながらも、オレはメイを大切にしたかった
将軍としては問題があるかもしれんが・・・・

メイが不機嫌になるキッカケは、
オレにとっては何気ない事が、原因である事が多かった
できる限り、オレはメイに合わせるようになっていった
ややギクシャクしつつも、二人で過ごす時間は、
お互いにとって最高の時間だと信じていた

暫くして、オレの耳に良くない噂が舞い込むようになった
夜な夜な、メイが浮気をしている。そんな噂だ
それを鵜呑みにするつもりは無かったが、気にならないと言えば嘘になる
そんなある日、メイが見知らぬ男と楽しそうに歩いているのを見てしまった
ただの友達・・・だろう
メイには冒険者仲間が数多くいるのだから・・・
だが、オレの中に、少しずつ不信と不安が募り始めていた

そして、また詰まらない事で、メイは不機嫌になっていた
今日の軍議は、至極普通だったと思うが・・・
メイにとっては気に入らないことがあったようだ
「それを言うなら・・・メイも少しは自粛してくれないか？」
オレは言ってしまった
「何を・・・？」
「オレの知らない男と会っていただろう？」
「え・・・ただの冒険者仲間だよ？
アタシの友達の事にまで口出ししないで」
「オレの事には口出しするじゃないか」
「だって・・・嫌なものは嫌なんだもん・・・」
「メイが嫌だと思う事は、オレも嫌だ

お互いに少し気を付けてみないか？」
「ラーさんと・・・ラーさんとの時間作るために、他の友達との時間減らして、
付き合い悪くなったって言われてるのに・・・アタシ、友達いなくなっちゃう・・・」
「オレのために・・・無理はしなくてもいい
少しだけ考えてみてくれ」
メイはそれ以上何も言わず立ち去った
オレは溜息をついていた
いつからこうなってしまったのか
憂鬱な日が増えた
しかし、それでもメイと楽しく過ごせる時間はある
それはオレにとって、何物にも代え難いものなんだ・・・

そんなオレの元に、聞きたくない情報が入った
「メイが・・・帝国魔兵長ゲボルグと内通してるだと・・・？」
報告書を見てオレは愕然とした
何かの間違いだと信じたい
私情もあるが・・・将軍として調べる必要がある
真実を知りたい、だが知るのが怖い
そんな感情がオレの中でせめぎ合った

それから数日
オレとメイの関係は良好だったと言える
嫌なことなど全て忘れてしまえるほど、幸せな時間を二人で過ごした
だが、報告書には・・・
メイがゲボルグと会っている事は間違いないようだ
「帝国魔兵長ゲボルグと会っているというのは本当なのか？」

二人きりの大切な時間
だが、確かめなければならない
「うん、たまに会ってるけど・・・？
ゲボルグは冒険者仲間なの
出世しちゃって忙しいみたいでね
あ、ラーさんが心配するような関係じゃないから、ね？」
無邪気なメイの笑顔が心に痛い
「そうだとしても・・・相手がまずいのは分かるな？」
「え、なんで・・・？」
「アイザスとベルグ帝国は戦争をしているんだぞ
しかもゲボルグはアイザス方面軍の司令官・・・」
「うん・・・アタシもゲボルグと戦うのは嫌だから、
戦わずに済めばいいねって話してる」
話が微妙に噛み合っていない
メイが意図的に情報漏洩している事もないだろう
私情もあるが、そう信じたい。だが、
「ゲボルグとは、もう会わないでくれないか・・・？
このままではメイに内通の嫌疑が掛かってしまう」
「えー。なんでそうなっちゃうの？」
「頼む・・・これだけは言うことを聞いてくれ・・・」
「やっぱ、軍隊なんて性に合わないのかなぁ・・・？
友達とも自由に会えないなんて・・・」
しばし、考え込むメイ
「うん！　アタシ、アイザス軍から抜けるね！」
そう言ってメイは立ち去ってしまった

## ラサ戦記１４　疑惑（後書き）

翌日には、メイの退役願いが提出された
軍法会議にかけ、拘束する事もできた
だが、それだけはしたくなかった
オレは将軍失格かもしれない・・・・

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

メイ：僧兵　１０代後半
イメージカラー：茶髪＋ピンク
ラサが命の恩人

## ラサ戦記１５－１　占い師（前書き）

メイがアイザス軍から抜けても、恋愛関係は相変わらず続いていた
とは言え、楽しく過ごせる日は減り、
つまらない事で喧嘩する事が増えていたのも事実だ
オレの方が不機嫌になる事もあった
今までの不信や不安に加え、オレの中に怒りという感情が生まれていた
喧嘩をしては仲直りの繰り返し
喧嘩をするほど仲がいいと言うが、
オレ達がそれに当てはまるのかは分からなかった
「ラーさん怒ると、すごく怖い・・・・」
「ごめんな・・・」
メイを抱きしめ、優しく髪を撫でる
「もう怒んないでね？」
上目遣いにみつめてくるメイが愛おしい
お互い、くだらない喧嘩に疲れ、何度も別れを考えた
それでもオレ達は、お互いを必要としていた

## ラサ戦記１５－１　占い師

その日、オレの機嫌は最悪だった
「ラサ、ちょっと付き合いなさい」
「リームか。悪いが・・・・」
「覇気がありませんわね。少し、やつれたのではなくて？
将軍がそんなでは、アイザス軍の士気に関わりますわ」
「すまん・・・・」
「メイちゃんとうまくいってないようですわね」
「・・・・！」
図星だった
「知り合いに、当たると評判の占い師がいますの
ちょっとアレな所もあるけど・・・・腕は確かですわ
いいから付き合いなさい」
これに付き合うと、また詰まらない喧嘩の種になりそうだが・・・・
急用ができたと、今日の約束を破ったのはメイの方だ・・・・
リームは逡巡するオレを急き立てるように、引っ張って行った

占い師の店にて
「リームちゃん、いらっしゃい～♪　・・・・あ！」
テーブルから水晶玉が落ち、壊れた
占い師が立ち上がった拍子に、テーブルに引っかけ、落っことしたのだ
「あぁん・・・・また・・・・」
「ユキちゃん・・・・相変わらずですわね」
「ぁはは・・・・
あ・・・・そちらの方は？」
不機嫌そうな顔のオレを見て目を逸らし、リームに尋ねる
「アイザス救国の英雄、ラサ将軍ですわ」

「え、この人が、リームちゃんの言ってた？」
「ユキちゃん！」
「あ、ごめ・・・」
口に人差し指を当てるリームに苦笑するユキ
「せっかくだから、占いをしてくださいます？」
「うん☆　あ、水晶玉は・・・カードでいいかな？」
慣れた手つきでシャッフルを始め、
「・・・あっ」
カードが弾けた
「本当に大丈夫なのか・・・？」
「大丈夫・・・だと思いますわ」
気が付くと、オレの心が少し和んでいた
アレな・・・と言っていたのは、そういう人物という事か
「ラサ将軍は・・・とても一途な方ね
目標を達成できる強い人
でも、今は星の巡りが悪いみたい。気を付けて
包容力もあるから、わがまま放題のリームちゃんとの相性も悪くはな・・・」
言いかけて、リームの視線に言葉を詰まらせるユキ
「あの時、わたくしに決めておけば、今頃は・・・」
ぼそっと呟くリーム。占いを続けるユキ
「周囲に強い光を持つ星がたくさんいるわ
振り回され過ぎないようにね」
オレは苦笑した。当たっている気がする
占いを続け、表情を曇らせるユキ
「それと大きな凶星が近づいてるわ・・・
鬼門の方角には、特に気を付けて・・・」
「丑寅の方角というヤツか、聞いたことはあるな。覚えておくよ」
それからオレ達は暫く談笑した
「少しは気晴らしになったかしら？」

「ああ・・・心配をかけたな。ありがとう」

その夜、オレの部屋の窓を微かに叩く音がした
「ラーさん・・・もう寝ちゃった・・・？」
窓に写る、俯いた人影
「メイじゃないか・・・」
「約束破ってごめんね・・・」
「そこは寒いだろう、おいで」
窓越しにメイを抱き上げ、部屋に迎え入れる
「やっぱりラーさん優しいね。すごく暖かい・・・」
「こんなに冷え切って・・・まさかずっとそこにいたのか・・・？」
「うん・・・でも、そんなに長い時間じゃないよ」
「今暖かい飲み物を」
「ううん、要らない・・・」
「風邪をひいてしまうぞ？」
「いっぱい抱きしめて・・・ラーさんに暖めてほしいの」
「メイ・・・」
冷え切ったメイをさすり、そして、力一杯抱きしめる
深く深く、口づけを交わす
「ねぇ、人って死んだらどうなるの？」
「どうしたんだ、急に？」
「教えて・・・」
「人は死んだら思い出になるのさ」
「そっか、素敵だね・・・
ラーさん、ありがとう・・・大好き・・・」
メイはそう言った後、かよわい力でオレを少し押した
「おねがい・・・逃げて・・・」
だがすぐにまた、オレを抱きしめてくれる
「逃げる？　どういうことだ？」

「アタシが・・・アタシでいられる間に・・・・
おねがいだから逃げて・・・・」
言葉とは裏腹に、オレを抱きしめる力が強くなる
メイが泣いている
「いったいどうした・・・・？　何かあったのか・・・・？」
「に・・・げ・・・・て・・・・！」
かぼそいメイの腕が、想像を絶する力でオレを掴んでいた

## ラサ戦記１５－１　占い師（後書き）

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

メイ：僧兵　１０代後半
イメージカラー：茶髪＋ピンク
ラサが命の恩人

リーム：飛兵　２０代前半
イメージカラー：金髪＋紫
アイザスの姫

ユキ：占い師　２０歳前後
ちょっと天然さんな占い師

## ラサ戦記１５－２　外法

オレは、ひとつ思い出した事があった
メイを招き入れた窓は鬼門の方角だった事を
「メイ・・・ッ！」
息を絞り出すように名前を呼ぶ
「やだ、みないで・・・」
涙を流し、顔を背けるメイ
「・・・みないでぇっ！」
メイの背中が弾けた
「なん・・・だ・・・こ、れは！」
異形の物体
触手のようなものが、オレに絡みつく
メイの姿が変貌していく・・・！？
「なんで・・・逃げてくれないの・・・？」
「メイを・・・置いていけるわけがないだろう・・・！
ぐあぁぁっ！」
締め付ける力が強くなる
巨大な異形が、メイを包み、オレを締め上げる
「こうなる前にね・・・帰ろうと思ってたの
アタシ一人で・・・消えようって・・・
でも、ラーさん・・・優しくするから・・・
帰るタイミング・・・なくしちゃった・・・」
「メイ・・・いったい・・・なにが・・・」
「これは・・・罰なんだって・・・
アタシ・・・そんなに悪い子だった？」
「そんな・・・事は、ないさ・・・」
「いいの、わかってる・・・。やっぱ優しいね・・・
あのね、アタシのおねがい、聞いてくれる？」

「ああ・・・何でも、聞いて、やるぞ」
顔だけしか見えなくなってしまったメイが微笑む
「アタシを・・・殺して・・・・」
「メイ・・・・!?」
「アタシに、ラーさんを、殺させないで・・・・
ちょっとだけ・・・頑張ってみるから・・・・」
これは・・・神聖魔法の詠唱・・・・!
オレの体力が回復すると同時に、少しだけ、締め上げる力が弱まった
オレは意を決して、力を振り絞った
「メイーッ!!」
触手から抜け出し、転がる
愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』の仕込まれた盾を手にする
安堵したようにメイは微笑むと、目を閉じた
メイの意思とは無関係に、オレに襲いかかる異形
転がり、盾で受けながら、剣気を練り上げていく
守るために追い求めた剣の道
しかし、今のオレにメイを救う術は・・・・?
せめて・・・・苦しみは一瞬に・・・・!
オレにしてやれることはそれだけだ
「魔剣・・・・閃光斬ッ!」
涙に霞む視界の中、魔族に対抗する剣技がメイを捉えた
異形が真っ二つになり、強い閃光の中で消滅していく
そして、人影が残る
倒れ込むメイをオレは抱き留めた
「ラーさん、やっぱすごいね・・・・」
オレの腕の中で微笑むメイ
「いっぱいわがまま聞いてくれて・・・・
優しくしてくれてありがとう・・・・」
オレも微笑み返し、頷いてみせる

「アタシ・・・ラーさんの思い出になれるかな？」
もう助からないことは誰の目にも明白だろう
「ああ、もちろんだ・・・」
「幸せに・・・なってね・・・」
抱きしめたメイが、灰になって消えていく・・・
「メイ・・・」
オレは血の涙を流していた

## ラサ戦記１５－２　外法（後書き）

「メイとの最後の夜は楽しめたか……？」
声が響いた
「貴様の仕業か……ッ！」

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

メイ：僧兵　１０代後半
イメージカラー：茶髪＋ピンク
ラサが命の恩人

## ラサ戦記１５－３　凶星

未だ姿を見せない声の主は、帝国魔兵長ゲボルグ・・・・！
「メイは元々、我が輩のモノだ
あまりのわがままぶりには手を焼いたものだがな
オマエもそうだろう？」
「メイは・・・モノじゃねぇぞ！」
直してほしい所もたくさんあった
だが、それも全部含めてメイじゃないか
「おイタが過ぎるのでな・・・
我が輩の言うことを聞くようにしてやったのだ
とんだ失敗作だったがな」
「ゲボルグ、貴様・・・！」
「憎きオマエを道連れにさせてやろうと思ったのだが、
まったくもって使えんヤツだ・・・
やはりメイの意識を残すべきではなかったか・・・？」
「外道がッ！　姿を見せろッ！」
「剣兵風情が・・・反撃の機会を与えず、
このまま部屋ごと吹き飛ばしてもいいのだが、それではつまらんな
・・・
悲しみと怒りに狂う所をこの目で見てやろう」
瞬間移動テレポートで出現するゲボルグ
余裕を見せた事を後悔させてやる・・・！
オレは愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』を
盾に仕込んだ鞘に戻し、身構えた
「血の涙か。これはいい・・・！
我が輩の気分も少しは晴れるというものだ」
哄笑するゲボルグ
これまで血の涙を流した事など無かった・・・

「ふむ、息も荒い。全身に負傷も見られる
心も体も折れる寸前・・・メイも駒としての役割は果たしたか」
「まだ言うか！」
ジリジリと間合いを測る
ゲボルグの分析は正しい、オレは消耗しきっている
異形に締め上げられた時に、肋骨も数本やられているようだ
渾身の魔剣閃光斬を使用した事で剣気も甘くなってしまっていた
「先ほども言ったが、メイは我が輩の『所持品』だ
少々放し飼いにしておったら、まさかオマエに取り入るとは、
僥倖僥倖・・・本当に愛されているとでも思ったか？」
饒舌にオレとメイを傷つけ続けるゲボルグ
震えが止まらない・・・これほどの怒りは経験した事がない・・・！
オレは、何も知らなかった。何も気付いてやれなかった
だが、オレとメイを否定される謂われはない・・・！
「オレが貴様を討ち漏らしたがためにメイは・・・
今日こそ決着をつける！」
怒りの感情が、心を折れぬように支え、
オレから立ちのぼる剣気がオーラとなっていく
「成り上がり者の剣兵が・・・死ね！」
短い詠唱、ゲボルグの放つ魔気もまた目に見えるほどだ
人材豊富なベルグ帝国で魔兵長を務めるほどの男・・・
これほどの外道とは思わなかったがな・・・！
「くっ・・・！」
連続で放たれた魔法の矢が、次々とオレに突き刺さる
だが、突破する！　突破してみせる！
勝機はそこにしかない！
メイ・・・走馬燈のように思い出が駆けめぐった
「瞬剣流星斬・・・ッ！」
抜刀一閃！
「その技、すでに見切っておるわ」

ゲボルグが瞬間移動テレポートを発動させる
だが！
「・・・改！」
返す刀でもう一撃！
ゲボルグが消える直前・・・捉えたッ！
「バカな・・・っ！」
あれから、この連閃を磨き続けてきた
開眼・・・『瞬剣流星斬・改』！
倒れ伏すゲボルグ
愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』の血を振り払う
ゲボルグの身体が溶けていく・・・もはや人間では無かったのか
「メイ・・・」
その名が自然とオレの口から漏れた
まだ幼さの残る少女を戦争に巻き込んだ罪悪感
守りきれなかった後悔・・・
刀を支えに、膝をつく
「・・・ッ！」
オレの首を何かが掴んだ
「オマエも・・・道連れだ・・・」
溶けていたゲボルグの細胞が増殖している・・・！？
赤黒い異形の手を斬り払い、飛び退く
「メイを実験体に・・・我が輩は不死を手に入れたのだ・・・」
「それ以上、メイを侮辱するなッ！」
こんな成れの果てのためにメイは・・・！
切り落とした異形の腕が再生する
「いい素材だ・・・オマエも実験体にしてやろう・・・」
這いずる異形
オレは、気力を振り絞り、剣気を練り上げる
「喰らってやろう・・・光栄に思え・・・」
「消え去れ・・・魔剣閃光斬ッ！！」

「ぐうぁぁぁ・・・再生が・・・できん・・・なぜだ・・・！」
閃光の中、消滅していく異形
「「「ラサ将軍！　何事ですか！」」」
激しくドアを叩く音が聞こえる
だがもう全て終わった・・・
意識が遠のいていく
「何をしているの、さっさと開けなさい！」
「「「ハッ・・・！」」」
カギをかけたままだったドアを蹴破り、兵士達が雪崩れ込む
「ラサ！」
「ラサ隊長！」
「ラサちゃん！」
倒れたオレに駆け寄ってきたのは、
リーム、ランテ、チャオか・・・心配かけてすまん
少し・・・眠らせてくれ・・・

## ラサ戦記１５－３　凶星（後書き）

『ラサ戦記キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている

ゲボルグ：魔兵　年齢不詳
イメージカラー：赤髪＋黒
ベルグ帝国魔兵長・ラサ最大の敵

リーム：飛兵　２０代前半
イメージカラー：金髪＋紫
アイザスの姫

ランテ：弓兵　２０代半ば
狩人。義勇軍の戦友

チャオ：弓兵　２０代前半
イメージカラー：茶髪＋青
傭兵。義勇軍の戦友

第１部完結です。ご愛読有り難う御座います☆
ラサ戦記？へと連載は続きますので、今後とも宜しくお願いします♪

## ラサ戦記？：１－１　赤と黒の星（前書き）

ラサ、それがオレの名だ
アイザス王国の将軍職を務めている
黒髪に黒瞳、服装と鎧は赤が基調だ
新調した赤い盾には鞘が仕込んであり、
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』が納められている
アイザス王国へと宣戦布告したベルグ帝国との戦争の渦中、
帝国魔兵長ゲボルグの策略により、オレは、恋人のメイを失った
仇敵ゲボルグを討ったオレは、
それを機にベルグ帝国への侵攻を提唱し、アイザス王国の領土を広げつつあった

## ラサ戦記？：１－１　赤と黒の星

将軍として連戦連勝を飾るのとは裏腹に、
オレの身体と心は少しずつ蝕まれていた
夜毎、苛む悪夢
ゲボルグが死に際に遺した呪いに冒されていたのだ
オレは、占い師ユキに相談を持ちかけることが多くなっていた
「少しずつ、星の配置がよくなってきていますよ
・・・赤と黒の星が見えるわ。転機になるかもしれない」
相変わらず抽象的な占いだが、悪くない結果が出たようだ

占い屋を後にしたオレの足は、いつの間にか、公園へと向かっていた
ここに来るのも久しぶりだな・・・
アイザスでの数少ない、オレのオアシスだ
大の字になって寝転がる
寝返りを打つと、小さな虫が、丈の長い草を登っていくのが見えた
テントウムシか。赤と黒の星・・・まさかな
ぼーっと眺めていると、人の気配がした
「悪いが、一人にさせてくれないか？」
その気配は、オレの隣に座っていた
「あら、ここは貴方の私有地なのかしら？」
振り返ると気配の正体は女だった
黒髪に赤を基調にした服装の女
「私有地じゃないが・・・
普通、人が居たら遠慮するのがマナーってものじゃないか？」
「そのマナーは誰が決めたの？
私は、そうは思わないわ」
その女は反論してきた

オレと同世代・・・いや、年上だろうか
「マナーってのは、皆がそれぞれ独自に守るものだろう？
少なくともオレは、ここに先客が居るときは、
遠慮するようにいているが・・・」
「それは貴方の流儀でしょう？
他の人にも押しつけるのはどうかしら」
努めて冷静に、オレは相手の出方をうかがっていた
そして、それは相手も同じようだった
「まあいいわ・・・別に貴方の邪魔をしたいわけじゃないの」
そう言って、少しだけ距離をあけ、再び座る
「そこだと同じじゃないか・・・？」
「そうかしら？」
苦笑するオレに首を傾げる女
「キミは、自分のテリトリーに侵入者がいたら、不快に思わないのか？」
暴言を吐く事もなく、意見を述べる
「そうね。でも、ここは公共の場所だわ」
口論・・・と言うよりは、議論に近い

オレは、いつの間にか、その議論が不快ではなくなっていた
意見は平行線だったが、そのやりとりが楽しいとさえ感じていた
気が付けば、随分長く話した気がする
「ふぅ・・・貴方の意見を受け容れるわけじゃないけど、ここは遠慮するわ
他人を不快にさせない。それが私の流儀よ」
一息ついて立ち上がる
「ありがとう」
背を向けた彼女に、オレは礼を言っていた
オレは暫く、オアシスで一人の時間を満喫した

そろそろ帰るか、と思った時だった
「あ・・・ここを空けるんだが、良かったらどうぞ」
目に留まった彼女に、オレはそう声をかけていた
「あら、これは御丁寧にどうも♪」
この場所の良さが分かる者同士の共感、といった所か
すれ違う時に、彼女の肩に小さな虫がとまっているのが見えた
さっきいたテントウムシだろうか？
オレは、そんな事を考えながら、帰路に着いていた

## ラサ戦記？：１－１　赤と黒の星（後書き）

『ラサ戦記？キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている
悪夢の呪いに蝕まれている

ユキ：占い師　２０歳前後
ちょっと天然さんな占い師

謎の女　年齢不詳
イメージカラー：黒髪＋赤
ちょっとミステリアスな新ヒロイン？

## ラサ戦記？：１－２　名前（前書き）

その夜も酷い悪夢にうなされた
厄介な呪いをかけられたものだ・・・・

## ラサ戦記？：１－２　名前

翌日、オレの足は再び公園に向かっていた
だが、オアシスには先客がいた
あの女だ
「また会ったな」
一声かけて、会釈する
「こんにちわ。良かったら隣にどうぞ
私は気にしないわ」
「いや、遠慮しておくよ
オレはオレの流儀を通す
それがオレの紳士道なんでね」
「あら、割と頑固なのね」
オレはその場を立ち去り、暫く公園を散策して帰ることにした

そして翌朝、オレは登城前に公園に立ち寄った
「今日はいないか」
別に期待していたわけじゃない・・・はずだ
オアシスに腰を下ろすと、目の前に彼女がいた
「今日は先を越されたかしら？」
「いや、どうやら今日は同時らしいな」
「あら、そんなとき、貴方の流儀ではどうなの？」
「ふむ・・・考え所だな」
隣に座り、オレを覗き込む女
ドキリとして息を呑む
「どちらにしても、暫くしたら仕事なんだ
今日の所は譲るよ」
やや目を逸らして、オレは立ち上がろうとした
「少し・・・話していかへん？」

「オレと・・・か？」
「他に誰がおるん？」
これまで感じていた言葉の違和感が、よりハッキリとわかった
複雑な表情で、オレは再び腰を下ろした
「やっぱ、この方が話しやすいわ」
これまでと違い、彼女の言葉には強い訛りが入っていた
「何キョトンとしてるん？」
「なんとなく感じていたのは、これだったのか」
「ああ、ウチの喋り？
初対面の人には使わへんのよ、特に堅そうな人には
真面目な話やったしね」
「そうか・・・」
「・・・やねんで」
「え？」
小声で、よく聞き取れなかった
とくべつ・・・と言ったような気がする
「ここの景色、好きなんよ」
聞き返しには答えず、そう言って遠くを見る彼女
「オレも、ここが気に入っているんだ」
そうして暫く談笑してから、オレは登城した

その日の午後、オレは占い屋を訪れていた
「いらっしゃいませ、ラサ将軍
ちょうどお茶の時間に・・・あ」
「おいおい」
その日のユキは、いきなりドジ全開だった
「ごめんねぇ」
こぼれたお茶を拭くユキ
そういえば、2日前にも同じ様な事が・・・？
「ユキの言っていた、赤と黒の星・・・

もしかしたら会ったかもしれん」
「うんうん。まさかラミちゃんだったとはねぇ」
「ラミちゃん？」
「あ、なんでもない。ごめん、勘違い」
ここ数日の記憶がフラッシュバックする
そして、オレの中で、すべてが繋がった
「そうか・・・！」
ラミという名には覚えがあったのだ
「どうかしたの？」
「いや、なんでもない」
そう言って、暫しのティータイムを楽しんだ

翌日
オレは軍務のついでに、ある調べ物をした
その日の夕刻
約束をしたわけではないが、オレは公園にやってきた
そして彼女はそこにいた
「お仕事ご苦労様、隣空いてるよ」
「ありがとう」
一瞬、躊躇したが、オレは彼女の隣に腰を下ろした
「ホンマに好きなんやねぇ、ここ」
「まあ・・・な
少し聞きたいことがあるんだが、いいか？」
一呼吸置いてから、オレは切り出した
「ん・・・ええよ？」
「キミ・・・もしかして、ラミという名前じゃないか？」
「え・・・なんで？」
「軍の名簿で見た記憶がある」
兵士全員の名前を覚えているわけではないが、だいたいは記憶している

ラミという正規兵は、オレの配下ではなかった
これでも軍の再編成を任された身だ
そして、ラミという兵士の評価は・・・特に高くはなかった
「それだけでウチと思ったん？」
「いや、２日前だが・・・オレ達は会っているな」
「なんやしらんけど・・・毎日会ってる気ぃするわ」
「そうだな。だが、ここではない場所でも会っている」
「え・・・？」
目を逸らす彼女
「ある将軍に、お茶を差し入れに来て、
派手につまづいて零していった女兵士がいたんだ
兜を目深に被っていたが、将軍配下の兵士じゃなかった
まあ、名前を聞いたのは偶然だったんだが・・・」
微かに溜息をついた彼女は、
「・・・鋭い人やなぁ
たったあれだけの事で気付くやなんて」
「どうやら当たっていたようだな」
「アンタ、ラサ将軍やろ？」
「ああ・・・そう言えば、まだ名乗ってなかったな」
「名乗らんでも名前は知ってたよ
確信は無かってんけど、どんな人なんかと思って、
ちょっとだけ見に行ったんよ」
「他人の振りをしてか・・・？　ずるいなぁ」
「せやかて、まだ他人みたいなもんやったやん」
苦笑するオレに、ちょっと膨れて見せる
「改めて自己紹介しておくか。ラサ、それがオレの名だ」
「ウチは・・・ラミいうねん・・・よろしく」
見つめ合う格好になり、気恥ずかしくなってお互いに目を逸らす
「こんなに早く気付かれると思わんかったわ・・・」
背を向けて呟くラミ

「でも・・・早く気付いてほしかったんかも・・・」

## ラサ戦記？：１－２　名前（後書き）

『ラサ戦記？キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている
悪夢の呪いに蝕まれている

ユキ：占い師　２０歳前後
ちょっと天然さんな占い師

ラミ：槍兵　年齢不詳
イメージカラー：黒髪＋赤
ちょっとミステリアスなヒロイン
アイザス軍の一兵卒

## ラサ戦記？：2　遠交近攻策（前書き）

いつの間にかオレは、ラミに会いに行くのが楽しみになっていた
呪いに蝕まれながらも、
その時間がオレにとって癒しになっているのは間違いない
そう、オレは彼女に惹かれ始めていた

また、アイザス将軍として上奏した遠交近攻策が取り入れられ、
アイザスは、ベルグ帝国周辺に位置する各国との同盟を締結させていった
唯一、ベルグ帝国に対して逆襲し、
領土を奪い返しているアイザス王国は、同盟の盟主国家となった

## ラサ戦記？：2　遠交近攻策

ラミとは、どちらからとなく毎日会うようになっていた
「また戦争に・・・行くんやね」
オレは頷いた
同盟国との連合軍を率い、ベルグ帝国の砦への侵攻が決定している
オレは、その総司令官に任命されていた
「ラミ・・・この戦から帰ったら・・・話があるんだ」
「なんなん？　えらい勿体ぶるんやね」
オレには密かに決意していた事がある
だが、その前に戦功を一つ立てておきたかったのだ
「ちゃんと帰ってきてや？」
「大丈夫・・・楽しみにしておいてくれ」
これでもアイザス将軍として無敗の戦歴を誇っている
ちなみに、ラミは王国守備軍として残る事になっていた

かくしてオレは、連合軍を率いてベルグ帝国へと侵攻した
この砦は重要拠点として、アイザスに睨みを利かせてきた
逆に、ここを奪えば、帝国攻略への大きな橋頭堡となる
砦を守るのは『鉄壁の盾』と謳われるベルグ帝国のニール将軍だ
帝国も切り札を出してきた
城を攻めるには三倍の兵力が必要という兵法に則り、
連合軍は砦守備軍の三倍近い兵力を用意した
遠交近攻策により、周辺各国が帝国へ反撃を開始している
結果、ベルグ帝国は、兵力を一点に集中できないのだ
「鉄壁の盾・・・伊達ではないな」
城壁と地形を活かし、数に勝る連合軍の砦侵入を阻んでいる
敵ながら見事な防衛戦術だ
「リーム飛兵隊は砦後方にまわり、陽動を！

機を見て陸戦部隊本陣で正面突破を試みる！
ランテ・チャオ両弓兵隊は、本陣の支援を頼む！」
「「「りょうかーい♪」」」

リーム隊が砦後方に回り込み、交戦開始
陽動が成功したのか、帝国軍の配置に変化が見えた
「今だ！　全軍突撃！」
「「「「「おおおおおーっ！！！」」」」」
衝車で城門を破り、砦に雪崩れ込む連合軍
「貴公が噂のラサ将軍か・・・
我が防衛戦術を破るとはなかなかのもの
だが、総司令官自ら突入してくるとは、まだ若いな」
先頭を切るオレに、重厚な鎧と巨大な盾を持つ将軍が立ちはだかった
「アンタも鉄壁の盾と謳われるだけの事はある
敬意を表して・・・一騎討ちだ！」
「望む所よ！」
間合いを測り、剣気を練り上げる
「飛剣真空斬！」
「フンッ！」
ニール将軍の戦斧が一閃し、オレの放った剣気が相殺される
「ほれ、背後にゲボルグの亡霊がみえるぞ！」
さらに肉迫するニール将軍！
ＧＡＫｉｉｉｉｉｎッ！！
愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』と戦斧が火花を散らす！
「その名を口にするな！」
大きく後方に跳んで、再び間合いをとり、もう一撃『飛剣真空斬』を放つ！
「きかぬわ！」
再び相殺されるが、瞬時に納刀した盾を前面に構え、突進！

「若い……読めておるわ！」
「瞬剣流星斬・改！」
ニール将軍の闘気が爆裂し、オレの連閃と交錯した……！

## ラサ戦記？：２　遠交近攻策（後書き）

『ラサ戦記？キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている
悪夢の呪いに蝕まれている

ラミ：槍兵　年齢不詳
イメージカラー：黒髪＋赤
ちょっとミステリアスなヒロイン
アイザス軍の一兵卒

リーム：飛兵　２０代前半
イメージカラー：金髪＋紫
アイザスの姫

ランテ：弓兵　２０代半ば
狩人。義勇軍の戦友

チャオ：弓兵　２０代前半
イメージカラー：茶髪＋青
傭兵。義勇軍の戦友

鉄壁の盾ファヴ・ニール：斧兵　中年
イメージカラー：黒
ベルグ帝国の重要拠点を守る将軍

## ラサ戦記？：３外伝　ラミ戦記（前書き）

ラサ戦記？：３　戦の行方

「・・・かはっ」
オレは壁まで弾き飛ばされ吐血した
「ベルグ帝国に刃向かったことを後悔するが良い・・・・」
一歩ずつ、鎧を軋ませながらニール将軍が迫る
オレの身体は衝撃で完全に麻痺していた
これまでか・・・。ラミ・・・すまん
オレの脳裏に浮かんだのはラミの笑顔だった
「これも武士の情け。その首級、貰い受けるぞ」
戦斧を振り上げたニール将軍
その鎧と盾に十字の亀裂が入る
「達人の剣は、相手に死した事さえ気付かせぬと聞く・・・・
その若さで、達人の領域とは・・・恐れ入ったわ・・・！」
傷口から盛大に血を吹くも『鉄壁の盾』は、立ったまま大往生を遂げた
「相討ちか・・・！？」
兵士の呟きが聞こえたような気がしたが、そこでオレの意識は途絶えた・・・

## ラサ戦記？：3外伝　ラミ戦記

ラサがおらんと退屈やなぁ・・・・
帰ったら話あるって何やろ・・・・？
待ち遠しいなぁ～♪
ウチみたいな一兵卒には、戦況の情報なんて入ってこーへんからなぁ・・・・
ラサ、勝ってるんやろか・・・・？
あ、ウチはラミ言うねん
年甲斐もなく『恋する乙女』状態なんよ☆
って誰が年甲斐もなくや！　まだ若いわ！

いつもの場所でぼーっとしてたら、非番やのに緊急召集がかかってん
え、帝国の奇襲部隊が攻めてきたって、どゆこと！？

慌てて登城して、兵士の列に並ぶ
壇上に立った司令官の状況説明が始まる
でもウチは正規兵言うても、病弱で、戦いには向いてへんのよ・・・・
普段から、事務とかお茶汲みとかが主任務
実戦経験もせいぜい物資輸送程度なんよ
槍の腕は正直言って大したことないねん
「帝国奇襲部隊が、アイザス城を包囲しつつある！
だが、案ずることはない！
ラサ将軍率いる連合軍が、砦を陥落させたという報告が入った！
連合軍の帰還まで持ちこたえるだけでいいのだ！」
「「「おおーっ！！」」」
歓声が上がる。やっぱラサは凄いなぁ～♪
「だが・・・ラサ将軍は『鉄壁の盾』と謳われた帝国将軍との

壮絶な一騎討ちにて相討ちとなられた！」
え、嘘やろ・・・？
今、ラサが相討ち・・・って？
「ラサ将軍に敬意を表し、何としてもアイザス城を守りきるのだ！」
「「「おおーっ！！」」」
ざわめきが司令官に鼓舞されて、熱気に変わる
でも今ウチは失意のどん底やわ・・・

虚ろな気持ちのまま、司令に従って配置につく
城門守備とか、最前線やん・・・
「槍兵隊整列！　構えーっ！」
今にも破られそうな城門の後ろで槍を構える

ほどなく、城門は破られ、帝国騎兵が突撃してくる
暫く交戦して持ちこたえたけど、だんだん押されてきてるわ・・・
「後退して帝国軍を中庭に誘い込め！」
司令通り後退すると、城壁から中庭へ矢の雨が降る
けど、城壁の弓兵隊も帝国飛兵隊に攻撃されて、
だんだん数が減ってるみたいや・・・
「城内突入を許すな！　ここが最後の壁だ！」
完全に包囲されてもうた・・・もうアカンかな・・・
次々と仲間の槍兵がやられていく
もうすぐウチの番やわ・・・
周りは敵ばっかり、その上、飛兵が急降下してきた
ラサと天国で逢えたらええなぁ・・・
「そこのアイザス槍兵！　諦めるな！」
飛兵から飛び降りてきた影が剣を一閃して数人を薙ぎ払う
涙が出てきた・・・
黒い髪、赤い鎧の後ろ姿
「ラサなん・・・！？」

「ラミ・・・なのか？　間一髪だったな」
振り返ったその顔は・・・
きゃー、ウチのヒーローやんか♪
「後退するぞ！　つかまれ！」
え、ちょっと、何すんの！
照れる・・・ホンマに照れる・・・☆
ラサはウチを抱き上げると、跳躍して敵軍を跳び越えていく！
これは『お姫様抱っこ』ちゅーヤツやん、きゃー♪
「ホンマにラサなん・・・？
相討ちになって戦死したって聞いて、ウチ・・・」
「勝手に殺すな」
ウチは、ぎゅーっとラサにしがみついた・・・☆

## ラサ戦記？：３外伝　ラミ戦記（後書き）

『ラサ戦記？キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている
悪夢の呪いに蝕まれている

鉄壁の盾ファヴ・ニール：斧兵　中年
イメージカラー：黒
ベルグ帝国の重要拠点を守る将軍

ラミ：槍兵　年齢不詳
イメージカラー：黒髪＋赤
ちょっとミステリアスなヒロイン
アイザス軍の一兵卒

## ラサ戦記？：４　大切な話（前書き）

ラミを抱きかかえたまま、城門まで進軍してきた連合軍と合流する
「アイザス城奇襲とは、帝国もやってくれる
危ないところだったぜ・・・」
必死にしがみついていたラミも、少し安堵したのか、腕の力を弛めた
腕の中にいるラミを暫し見つめる
「砦を落とした以上、帝国軍に逃げ場はない！
包囲して投降勧告を出せ！」
司令を出し、ラミをおろす
「無事で良かった」
そして、上空を旋回するリームに手を上げて礼を言う
先行してこれたのは彼女のおかげだ

程なくして、帝国奇襲部隊は全面降伏した
その日は、戦後処理に追われた

## ラサ戦記？：４　大切な話

翌日、アイザス王から勲章を賜った後、
オレはいつもの公園にラミを呼び出した
『幸せに・・・なってね・・・』
メイの遺した言葉だ
ありがとう・・・メイの事は忘れない
オレはメイへの想いを心の奥に大切にしまっておくことにした
「出陣前の約束、覚えていてくれたか・・・？」
「うん・・・。あ、勲章おめでとう」
少し気恥ずかしそうなラミは、オレの胸に輝く勲章に目をやった
自分の中でのケジメはつけた
今なら胸を張って言える
「これからずっと・・・ラミを守ってみせる
オレと・・・結婚してくれないか？」
後ろ手に持っていた花束を差し出す
「嬉しい・・・☆
けど、ホンマにウチでええの・・・？」
受け取りかけたラミの手が止まる
「ああ、ラミ以外考えられない」
「ドキドキする・・・
でもウチ、ラサに言わなアカンことあるわ・・・」
「なんだ・・・？」
「あの時な・・・、ホンマは邪魔してたんよ
ここはウチの場所やから、退いてほしかってん・・・」
「そんなことか。今は・・・どうなんだ？」
「今は・・・一緒に居られるのが嬉しい・・・☆」
他にもラミは、いくつか秘密を明かした
「よう考えてな・・・ホンマにええの？」

それは、人には言いたくない衝撃的な内容も含まれていた
「・・・オレの気持ちは変わらない」
「ありがとう・・・！　ずっと仲良くしてな♪」
花束を受け取ったラミは、そのままオレの胸に飛び込んだ
「そうと決まれば、指輪を用意しないとな」
「指輪やったら、もう用意してあるねん」
「え？」
「いつか・・・こんな日が来るのを夢見てたんよ」

そして、オレとラミは、皆に祝福されて結婚式を挙げた
ラミとの仲を皆に認めて貰えた事が嬉しい
公然とラミを守ることが出来る
それは、オレにとって大きな意味があった
「オレの側に居ろ・・・そこが一番安全だ」
「うん・・・☆
でも、足手まといにならへん？」
「大丈夫。必ず守ってみせるさ・・・」
オレは空席になっていた副官にラミを抜擢した
異例の人事となったが、誰もが認める結果を出せばいい
オレには、その自信があった
ラミが病弱の身である事はプロポーズの時に知った
オレの身体と心も呪いに蝕まれ続けているが、
ラミが側に居れば、きっと乗り越えられる
それが愛の力だと信じて・・・！

## ラサ戦記？：４　大切な話（後書き）

『ラサ戦記？キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている
悪夢の呪いに蝕まれている

ラミ：槍兵　年齢不詳
イメージカラー：黒髪＋赤
ちょっとミステリアスなヒロイン
アイザス軍の一兵卒

リーム：飛兵　２０代前半
イメージカラー：金髪＋紫
アイザスの姫

## ラサ戦記？：5　幸せの形

ラミとの結婚生活は、オレにとって最高の時間となった
朝起きると、隣に愛おしいラミの寝顔がある
もしくは、笑顔でオレを起こしてくれる
「おはよう・・・☆」
「ん・・・」
おはようの抱擁とキスだけで、
呪いによるダメージも癒される気がした

軍務においても、ラミと共に歩んでいく
オレは幸せに満ちあふれていた
軍備を増強し、連合軍を率いての破竹の進撃を見せた
ラミも副官として、充分に貢献している
オレの隣には、必ずラミがいてくれた

オレは全身全霊で愛情を捧げた
「愛してるよ・・・」
「ウチも・・・愛してる～♪」
ラミも愛情で応えてくれた
こと恋愛において、オレはまだまだ若かったが、
そこはラミが合わせてくれているように思えた
姐さん女房は金の草鞋を履いて探せという諺があるが、
まさにその通りだと実感していた
オレはラミの優しさに甘えているだけかもしれないが、
ラミは、オレのすべてを受け止めてくれた
「あーん・・・ラサぁ、これどないしたらええん・・・？」

「ん、これか？　これはな・・・」
逆にラミは人間性においては子供っぽい所があった
不器用でドジばかり
だがオレは、そんなラミが愛おしくて仕方なかった
「ラサは何でも出来るんやなぁ☆」
そうしてオレ達は、お互いに足りないところを
補い合いながら幸せな生活を送っていた

## ラサ戦記？：５　幸せの形（後書き）

『ラサ戦記？キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている
悪夢の呪いに蝕まれている

ラミ：槍兵　年齢不詳
イメージカラー：黒髪＋赤
ちょっとミステリアスなヒロイン
アイザス軍の一兵卒

## ラサ戦記？：６　心（前書き）

刻々と変化する戦況に対し、変わらない日常もあった
一日の終わり、おやすみのキス
呪いによる悪夢と戦わねばならない夜も、
ラミが居れば、安心して眠ることができた
それまで、二人は、一度も喧嘩らしい喧嘩はなかった
思えば、出会った日だけだったのではないだろうか
すべてが理想というわけではない
だが、それを補って余りある愛があった
生きていれば不満に思うこともある
オレも少しは大人にならねばと、
ラミのプライベートには口を出さないようにしてきた
これはメイとの恋愛で得た教訓だ

## ラサ戦記？：6　心

そんなある日
「ああ、やってしまったのか・・・・」
オレは一言だけ、つまらない事で口出ししてしまった
「喜んでくれると思ったのに・・・・」
いつものようにオレを喜ばせようとしてくれたのだろう
だが、それはオレにとって気に入らない出来事だった
初めて小さな亀裂が入った
小さな小さなすれ違い
だが、硬ければ硬いほど、亀裂が入ると脆いものなのか

ラミが少しずつ、オレと距離をあけていくのが悲しかった
オレの中にはずっと、メイを守りきれなかったという念がある
過保護すぎたのは自分でも分かっている
それをラミが窮屈に思っていた事も・・・・
気を引きたくて、意地悪な事もしてしまった
二人の日常は軋み始めていた
お互いに余計な部分で気を遣っていた
少しずつ、不安定になっていった
もしかしたら、先に心を閉ざしたのはオレだったかもしれない
それでもオレは、ずっとラミの側に居たかった

ある朝、目覚めるとオレの隣にラミはいなかった
テーブルに手紙が置かれていた
『ラサへ
持病で体調がすぐれません
暫く一人にさせてください

何かあったら、手紙で知らせて…『
手紙の下には、軍への休暇願があった
ラミは自室に引きこもっていた
ノックをしてみたが、返事は無かった
暫く呆然と立ちつくしていた
「手紙…みてね」
オレの気配に気付いたのか、一言だけ返事があった
ラミの部屋のドアに手紙を差し、オレは登城した

それから暫くの間、手紙だけのやりとりが続いた
と言っても、手紙の返事の無い日もあり、
次第にオレからの一方通行となる事が多くなっていった
逃げられれば追いたくなる
追われれば逃げたくなる
ラミと逢えない日々
夜毎、苛む呪い
悪夢の連鎖
ラミが持病のことで、余裕がなくなっていたにも関わらず、
オレはラミを求めてしまった
これほど、オレはラミに依存してしまっていたのか
それに気づいて、オレが立ち止まった時にも、
ラミは逃げる足を止めなくなっていた

呆れられたのか、飽きられたのか
どんなに求めても、ラミは心を開かなかった
もう、恋の魔法は解けてしまったのだろうか？
オレの想いがラミを苦しめる
ラミもオレを傷つけていることを手紙で謝っていた

ついにオレは、この状態に耐えきれなくなった

最後の賭けをしよう
ラミの気持ちをハッキリ確かめよう
『愛するラミへ
オレの愛情は変わっていない
ずっと、戻ってきてくれると信じていた
待ってと言ってくれるなら、いつまででも待つ
けど、一目、笑顔を見せて欲しい・・・・
もし、オレと居る事が苦痛なら・・・・解放する
今まで愛してくれてありがとう』
オレはサインを入れた離婚届を添えた手紙を出した

翌日
軍務から戻ると、テーブルにはラミからの手紙があった
オレの予測は半々・・・・いや、もっとずっと分の悪い賭けをした
恐る恐る手紙を読む

『これが私にできる最大の愛情です
今まで愛してくれてありがとう』

すでに離婚届は提出されていた
そして、ラミは、オレの前から完全に姿を消していた
自然と涙が流れる
失いたくはなかった
しかし、オレには繋ぎ止めることはできなかった・・・・
オレは、ラミを探すことはしなかった

## ラサ戦記？：６　心（後書き）

失意のオレは、軍務に身を捧げて、心を紛らわせる事しかできなかった
だが、ある意味、最後にオレは解放すると言いながら、
むしろ、オレの方が解放されたのかもしれない
完全に諦めることができた。未練はない・・・はずだ
ラミと過ごした日々は、オレにとって、間違いなく幸せだった
ありがとう・・・
指輪と共に、ラミを想い出として大切にしまうことにした

『ラサ戦記？キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている
悪夢の呪いに蝕まれている

ラミ：槍兵　年齢不詳
イメージカラー：黒髪＋赤
ちょっとミステリアスなヒロイン
アイザス軍の一兵卒

## ラサ戦記？：7　万屋（前書き）

人は、悲しみを忘れることが出来る
それは神が与えた慈悲だろうか？
もちろん、想い出を振り返ることは多々あるが、
ベルグ帝国との決戦が迫っている今、
いつまでも悲しみに暮れているわけには行かない
失ったものが大きかった分、オレは成長できたのではないだろうか

## ラサ戦記？：7　万屋

オレにはアイザスに来てから贔屓にしている万屋があった
装備の新調・修理から、消耗品の購入まで、
オレが必要とするものの大半は、その店で揃える事が出来た
決戦に備え、オレは万屋へとやってきた
「お客様・・・困ります・・・」
「俺達は『お客様』なんだぞ、サービスしろよ！」
店先で、店員が3人の男に絡まれていた
周囲は見て見ぬ振りか・・・
「おい、他の客の迷惑だ。失せろ」
オレは絡んでいる男の肩をつかんで振り向かせた
「ぁあ！？　なんだてめぇ！」
「ただの客だ。迷惑だから失せろと言っている」
「「「ぁあ！？」」」
ガラの悪い目つきで、下から上へとオレを睨む3人
「俺達は、この店員さんに用があるんだ
邪魔すると痛い目に遭わすぞ！」
「ほう、やってみろ」
悪いが、オレはまだ虫の居所が悪いんだ・・・
詰まらない事でオレを怒らせるな・・・！
「カッコつけやがって！　いい度胸だ！」
殴りかかってくる男の腕を掴んで、いなす。
「ああ、お客様・・・やめてくださいまし」
おろおろする店員を庇うように立つ
愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』は腰にあるが、
防具一式は修理を頼もうと、まとめて背負っている状態だ
チンピラ相手にはちょうど良いハンデか？
「やっちまえ！」

３人掛かりで殴りかかってくる
だが、裏拳・肘鉄・膝蹴りで一撃ずつ返す
専門職には遠く及ばないが、体術の心得はある
「こ、コイツ・・・ナニモンだ」
「知るか！　こうなったら！」
３人は手に手に武器を取りだした
「やめておけ・・・
素手ならば使わないつもりだったが、後悔するぞ？」
愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』に手をやる
「後悔するのはそっちだ！」
そして、３人は忠告を聞かなかった
「つ、強ぇ・・・」
峰打ちで打ち据えられ、のたうつ３人
「「「おぼえてろよ！」」」
月並みな捨て台詞で逃げていく
「あの・・・ありがとうございました」
「大したことはしていない・・・乱闘に発展させて悪かったな」
店員を振り返る
この万屋の看板娘だ
よく応対してもらった記憶がある
「あ・・・あっ・・・ラサ様！？」
「オレを知っていたのか」
「も、もちろんでございます・・・
いつも御贔屓にして頂いている御得意様ですもの・・・」
なにやらもじもじしている看板娘
「ここは品揃えも修理の腕も良い店だからな」
「あ、ありがとうございます！」
「で、早速なんだが、修理を頼めるかな？」
「は、はい☆　あの、こちらへ・・・」
誘導されるまま、カウンターへ

「ここを暫くお願いします」
看板娘は別の店員に一言告げ、オレを応接室らしき所へと通した
「ここは・・・？」
「特別な商談をするための応接室ですわ」
いつも用件はカウンターで済んでいた
こんな所へ通されたのは初めてだ
「申し遅れました、わたくしアイリスと申します
先ほどは助けて頂いて有り難う御座いました
御礼・・・というほどではありませんが、特別割引させて頂きますわね」
「悪いな・・・そんなつもりでは無かったのだが」
「他のお客様には内緒ですよ？」
口元に人差し指を当てて微笑むアイリス
「そうか・・・では、お言葉に甘えるとしよう」
オレはまとめてきた防具一式をテーブルに広げた
「ラサ様の御活躍は聞き及んでおりますのよ」
アイリス自らいれた紅茶を差し出してくれる
「そんなラサ様が店にいらっしゃった時は驚きましたわ
それからもずっと御贔屓にして頂いて」
じっとみつめてくるアイリス
「あら、わたくしったら、
ずっと憧れの存在だったラサ様に助けて頂いて、
舞い上がってしまっていますわ・・・☆」
「それは光栄だな」
オレも自然と顔がほころんだ
アイリスは丁寧な言葉遣いだが、まだ１０代後半に見える
しっかりとした教育と躾をされてきたのだろう
オレは、暫くアイリスと談笑した後、
防具一式を預け、消耗品を購入して帰ることにした

## ラサ戦記？：７　万屋（後書き）

『ラサ戦記？キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている
悪夢の呪いに蝕まれている

アイリス：万屋看板娘　１０代後半
イメージカラー：黒髪＋青
お淑やかな万屋看板娘。意外と積極的

## ラサ戦記？：８　愛刀

数日後
修理を頼んだ防具一式を受け取りに万屋へと行った
「いらっしゃいませ。修理完了しておりますわ」
再び、応接室へと通される
新品同様となった防具をアイリス自ら、装着させてくれた
「凛々しいお姿・・・よくお似合いですわ☆」
「ありがとう」
なかなか手際の良い鎧の着付けだ
「わたくし・・・縁談が決まっておりますの・・・」
オレの背後で呟くアイリス
「そうか、それはおめでとう」
オレは祝福の言葉を述べたが、アイリスの気配は、どことなく暗かった
「でも・・・わたくし・・・！
ラサ様が・・・ラサ様の事が好きなんです！」
突然の告白
オレの背に身を寄せるアイリス
「アイリスさん・・・気持ちは嬉しいが・・・」
「わたくしのこと・・・お嫌いですか？」
背後で身を固くするのがわかる
「そういうわけじゃないが・・・
オレは、きっとキミを不幸にする」
「お父様の決めた見知らぬ殿方に嫁ぐより、
わたくしは、ラサ様にお側に居とうございます・・・」
「オレは、すでにバツイチなんだ
キミには相応しくない」
「存じておりますわ・・・

ラサ様が御結婚なされて、
この恋は憧れだったのだと、自分に言い聞かせましたの・・・
お父様に言われるまま嫁ぐのも仕方ないと思いました
でも・・・ラサ様は、
困っているわたくしの前に颯爽と現れて、助けてくださいましたわ
わたくし、運命を感じましたのよ」
「運命・・・か」
オレは自問した
まだアイリスの事をよくは知らない
だが、惹きつけられるものがあるのは確かだ
突然の告白に面食らったが、嬉しくないと言えば嘘になる
「正直言って、嬉しいよ
だが、一晩だけ考えさせてくれないか？
アイリスさんも、よく考えてみてほしい」
「はい・・・」

その夜
愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』の手入れをし、
精神統一してから、考え始めた
ラミとの離婚は成立している。行方も分からない
でもきっとオレは、今でもラミを好きだと思う
この想いが消えることはないだろう
だが、ラミとの事は想い出として大切にしまった
アイリスに惹かれているのも事実だ
オレは・・・大切な人を二人も不幸にしてしまった
しかも、この身は悪夢の呪いに冒されている
だが、メイやラミと過ごした時間までが不幸だっただろうか？
否、間違いなく幸せだった
不本意な結果にはなったが・・・幸せだった
少なくとも、オレが幸せだった間、

彼女達にも幸せを感じさせることができたと思う
恐れていてはいけない
オレを必要としてくれる人が現れたのだから

翌朝
オレはアイリスに会いに行った
「いらっしゃいませ、ラサ様」
再び、応接室へと通される
「ラサ様の仰った通り、一晩じっくり考えました
でも、わたくしの気持ちは変わりません・・・・！」
決意に満ちた目でオレをみつめるアイリス
「そうか・・・これがオレの答えだ」
盾から愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』を
鞘ごと外して差し出す
「これはオレの魂とも言える愛刀だ」
これまで、愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』の
手入れは自分でやってきた
だが、実は『鉄壁の盾』との一騎討ちで、
深刻な刃こぼれを起こしていたのだ
オレの手には負えない破損状況だった
魂とも言える愛刀を委ねられる者もおらず、
騙し騙し使ってきたのだが・・・
「修理を頼む。これがオレからの信頼の証だ」
「は・・・はい♪　嬉しゅう御座います・・・」
愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』を受け取り、
愛おしそうに抱きしめるアイリス
「アイリスの感じた運命に賭けてみるのも悪くない」
「ラサ様・・・☆」
オレ達は誓いの口づけを交わした

## ラサ戦記？：８　愛刀（後書き）

『ラサ戦記？キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている
悪夢の呪いに蝕まれている

アイリス：万屋看板娘　１０代後半
イメージカラー：黒髪＋青
お淑やかな万屋看板娘。意外と積極的

## ラサ戦記？：9　出陣前夜

愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』の修理には、数日が必要だった
決戦は近い
いよいよ、ベルグ城攻略戦だ
ベルグ皇帝を討ち取れば、この戦争は終わるはずだ
綿密な作戦会議を繰り返し、出陣の日程を決定した
ちょうど、愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』の
修理が完了する日である

軍務に追われ、
さらに呪いに苦しむオレを癒してくれたのは、アイリスだった
この数日で逢い引きを繰り返し、絆を深めてきた
「この戦争が終わったら、アイリスの御両親に、
正式な御挨拶をしようと思っているんだ」
「アイリスは幸せ者で御座います・・・☆」
アイリスを抱きしめ、深い口づけを交わした

そして、出陣前夜
愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』を受け取りに、
万屋へとやってきたのだが、
迎えてくれたアイリスの顔色は蒼白だった
「ラサ様・・・大変なことになってしまいましたわ・・・」
「いったいどうしたんだ？」
「わたくしとラサ様の仲に、お父様がお気付きになられて・・・
それはお怒りになられておりますの・・・」
「わかった。アイリスの父上と話をしよう」
「アイリス！」

そこで血相を変えた初老の男が応接室へと乱入してきた
「お父様・・・」
怯えるようにオレの後ろに隠れるアイリス
「きさ・・・いや、貴方がラサ将軍ですかな？」
怒り心頭という顔から、瞬時に冷静な顔になる
なかなかの商人と見た
「御挨拶が遅れました。アイザス将軍職、ラサと申します
ベルグ帝国との決戦を控えておりまして、
勝利の暁には、アイリスさんとの仲を認めて頂けるよう
御挨拶に伺う所存でした」
「ラサ将軍には、個人的に我が万屋を御贔屓にして頂いているとのこと、
誠に有り難う御座います
ですが、娘のアイリスと個人的に親しくされては困ります
すでに、アイリスには縁談がまとまっておるのです」
「お父様！　わたくしは、ラサ様に嫁ぐと決めたのです！」
「おまえは黙っていなさい
ラサ将軍、何卒お引き取りを。これは心ばかりで御座います
それで、この話は無かったことに・・・」
そう言って、アイリスの父は小さな包みを差し出した
手切れ金・・・口止め料込みというところか
「受け取れません」
「それではこれで・・・何卒」
包みを上乗せしてくる
「金額の問題じゃない。心から・・・アイリスを愛しています」
「ラサ様・・・」
嬉しそうに寄り添ってくるアイリス
「ラサ将軍、貴方は若い
世渡りというものを分かっていらっしゃらない
父である私が認めないと言っているのです

私も人の親。体裁だけでなく、娘の幸せも考えての事
お察し願えませんか？」
「そこにアイリスの意思はあるのか？」
「そうです、お父様。
わたくしには・・・ラサ様と共にあることが、一番の幸せなのですわ」
真摯に父を見つめるアイリス
「ふむ・・・
時にラサ将軍は、明日出陣でしたな・・・？」
「はい。必ずや、アイザスを勝利に導いて見せます」
「わかりました。この話の続きは、ラサ将軍が凱旋した時に、改めてさせていただきましょう
御武運を・・・
今夜はアイリスと語り合って行くと良いでしょう」
そう言って退席するアイリスの父に、
「ありがとうございます！」
と礼を言った

再びアイリスと二人きりとなった
「ラサ様・・・お願いが御座います・・・」
周囲を気にするように耳元で囁くアイリス
かかる息がくすぐったくも気持ちいい
「どうか、アイリスを連れていってくださいまし・・・」
「何を言っているんだ？
戦場にアイリスを連れていけるわけがないだろう」
「お父様はきっと・・・ラサ様がいない間に、
縁談をまとめるおつもりなのですわ・・・
お父様は頑固な方ですの
わたくし、ラサ様と駆け落ちする覚悟もできていますのよ」
「駆け落ち・・・って、話が飛躍しすぎだ

大人しく、オレの帰りを待っていてくれ」
だが首を横に振るアイリス
「もし、ここで一緒に行かなければ、
もう二度と逢えない気がして・・・怖いのです・・・
どうか、お側に居させてくださいまし・・・」
「アイリスもオレの戦歴は知っているだろう？
必ず戻る。『クリムゾンウインド』を渡してくれ」
アイリスが大切に抱えている
愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』に手を伸ばす
「あ・・・！　こ、これは・・・その・・・
ま、まだ修理ができていませんの・・・
け、剣がなければ・・・出陣なさいませんわよね？」
咄嗟についた嘘だ、という事はわかる
アイリスは、何をそこまで怯えているのだろうか？
「出陣の日程はもう変えられない
アイリスを戦場に連れていく事もできない
アイリスの事は一番大切にしているが、
ここで駆け落ちしてアイザスから逃げるわけにもいかない
わかってくれ・・・」
アイリスは瞳を潤ませ、首を横に振ると涙が散った
「・・・その『クリムゾンウインド』はオレの魂だ
修理が終わっていないのならばアイリスに預けておく
オレだと思って大切に持っていてくれ
刀は魂、鞘は魂の帰る所なんだ
オレは刀、アイリスは鞘だ。必ず帰ってくる」
そうアイリスに言い聞かせると、
「約束・・・ですわよ」
抱きつき、口づけをするアイリス
オレもアイリスを強く強く抱きしめた

## ラサ戦記？：９　出陣前夜（後書き）

『ラサ戦記？キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている
悪夢の呪いに蝕まれている

アイリス：万屋看板娘　１０代後半
イメージカラー：黒髪＋青
お淑やかな万屋看板娘。意外と積極的

アイリスの父：万屋店主　中年
イメージカラー：白髪混じり＋茶
独善的な頑固親父

## ラサ戦記：エピローグ（前書き）

ラサ戦記？：１０　決戦

翌朝、オレは連合軍を率いて出陣した
「あれ、いつもの剣じゃないのね」
最初に気付いたのはランテだった
「将軍用に支給される剣ですわね」
「ああ。アイザスの命運を賭けた一戦だからな」
リームへ、剣のアイザス王国紋章をかかげてみせる
「殊勝な心がけですわ」
「ラサちゃん大丈夫なの？
チャオは、この弓じゃないと調子出ないけどなー」
「皆が居れば、大丈夫さ。必ず勝って帰ろう！」
「「「おー！」」」
連合軍は、ベルグ城を包囲した

## ラサ戦記：エピローグ

アイザス連合軍は、ベルグ城城門を破り、雪崩れ込んだ
連合軍内部で、同盟国の裏切りが発生するという
ベルグ帝国最後の策に遭うも、
無敗を誇ったラサ将軍率いる連合軍は、ベルグ皇帝を討伐した
戦死者は過去最大にのぼったという
彼らが残した平和が、永久に続く事を願う

ラサ戦記？：エピローグ外伝　アイリス剣記

ああ、わたくしは何と愚かな事をしてしまったのかしら・・・・！
ラサ様を引き留めたい一心で、
この刀の修理が終わっていないなどと嘘をついてしまうなんて・・・・
きっと、嘘だと気付いていらっしゃったはず・・・・
それでも、わたくしの不安を和らげるために、
この刀を残してくださったのですわね・・・・

わたくし、アイリスと申しますの
この刀は、愛するラサ様の
愛刀『深紅の風クリムゾンウインド』ですわ
最初は、ただの憧れでしたの
でも運命の日、わたくしの前に颯爽と現れたラサ様・・・・☆
わたくし、本当の恋に落ちてしまいましたわ♪
ラサ様はアイザスの将軍ですのよ
今は・・・戦争に行かれていらっしゃいますが・・・・
帰ったら、アイリスをお嫁にもらってくださいますの☆

わたくしは、片時もラサ様の刀を離すことなく、待っておりますの

ラサ様が出陣なされた日の午後
「アイリス、一緒に来なさい」
お父様に呼ばれましたわ。まさか・・・・！
「やっぱり・・・お父様の嘘つき・・・・」
「嘘などついておらん
ラサ将軍がお戻りになられたら、改めて、お断りをいれる
あれはそういう意味だ」
「いやです・・・！
わたくしは、ラサ様と・・・・」
「聞き分けのない事を言うな！
これはもう決まっている事なのだ」
やはり、お父様は・・・
わたくしの縁談をまとめてしまうおつもりでしたのね・・・
お兄様に跡を継がせ、わたくしを大きな商家へ嫁に出す事で、
万屋を大きくする事しか考えていないのですわ・・・
ラサ様・・・わたくし、ラサ様の元へ参ります！
そう決意したわたくしは、
ラサ様の愛刀を握りしめ、家を飛び出しましたの・・・・！

でも、わたくしは世間知らず・・・
お父様に言われるまま、花嫁修業とお店番だけしてきましたの
唯一、ラサ様がわたくしを何度か、
内緒で外へ連れ出してくれた事があるだけですわ
ラサ様のいらっしゃる戦場はどこなのかしら・・・？
行く先もわからず、アイザスの街を彷徨いましたわ・・・
とても心細い・・・街行く人々も、
わたくしが目に入らないかのように通り過ぎるだけ

途方に暮れて、ラサ様の愛刀を抱きしめる事しかできない
・・・！
わたくしを導いてくださいますの・・・？
ラサ様の愛刀が・・・、
わたくしの行き先を示してくれている気がしますわ♪

気が付くと、わたくしは占い屋らしき所に来ていましたの
「いらっしゃい・・・あら？」
大きな目を細めて、わたくしを凝視する占い師様
「その刀・・・貴方は？」
「わたくし、アイリスと申しますの
これは、わたくしの大切な方の愛刀ですわ」
占い師様は、わたくしの身の上話を聞いて下さいましたわ
「そう・・・貴方、気付いていないのね？
いいわ、私が彼の居る所に案内しましょう」
「ご親切に・・・有り難う御座います☆」

占い師様に連れられ、わたくしはアイザスを後にしましたの
この方、ラサ様を御存知のようですわ
ラサ様は、アイザスきっての将軍様ですもの
知っていても不思議はないですわね
「これは、わたくしを守ってくれると言って、
置いていってくださいましたの・・・
でも、愛刀を持たずに出陣なされて・・・
きっと困っていると思いますの。届けて差し上げないと・・・」
「なるほど・・・ね」
何だか占い師様、少し遠い目をしていらっしゃいますわ
それに何度も道を間違えていらっしゃるような・・・？
大丈夫なのかしら・・・？
ラサ様の愛刀を抱きしめると

『大丈夫さ』
と、ラサ様が励ましてくれたような気がしましたわ

「このあたり・・・ね」
周囲を見回す占い師様
ここはお城のようですわ
でも、なんだか寂しい所ですわ・・・
城壁も所々壊れているみたい・・・
ああ、きっとラサ様が攻め込んだからですわね♪
あ、呼んでいる！
ラサ様の愛刀に導かれるように、わたくしは走り出しましたわ
黒い髪、赤い鎧・・・凛々しい後ろ姿・・・☆
「ラサ様！」
わたくしの声に振り返ったラサ様の表情が、
笑顔へと変わっていく・・・！
「アイリス！」
両手を広げたラサ様の胸に飛び込みましたわ♪
「会いたかった・・・！」
「お会いしとう御座いました・・・！」
力一杯抱きしめて下さるラサ様に、
わたくしも力一杯抱き返しましたわ・・・☆
「これを・・・届けに参りましたの」
「ありがとう、アイリス
アイザス連合軍はベルグ皇帝を討伐したよ
帰りが遅くなって・・・心配かけたな」
「占い師様が、ここへ連れてきてくださいましたのよ」
わたくしが振り向くと、
ラサ様もわたくしを抱いたまま、そちらを見られましたわ
「キミは・・・ユキじゃないか
ありがとう・・・」

「ラサ将軍、お久しぶりね
もう、3年になるかな・・・」
あら、本当にお知り合いでしたのね
「もうそんなになるのか・・・」
「ラサ将軍のおかげで、アイザスは平和よ」
「そうか・・・良かった」
なんだか、ラサ様と占い師様は、
遠い過去の話をされているように聞こえますわ・・・なぜかしら？
あ・・・！
わたくし・・・すべて思い出しましたわ・・・！
家を飛び出して・・・その時・・・馬車にはねられて・・・
「ラサ将軍は・・・ベルグ皇帝との一騎討ちの最中、
同盟軍の裏切りに遭ったと聞いているわ・・・」
「ああ・・・そうだったな・・・」
ようやく、理解できましたわ
「そうでしたのね・・・」
わたくしもラサ様も・・・すでに、この世の者ではないのですわね
そして、ラサ様は、戦争を終結させた英雄になられたのですわ
最後にわたくしとの約束を守るため、待っていてくださったのですわね
「わたくし・・・ここでラサ様と、
ずっとお傍に居られるなら、それだけで幸せですのよ・・・☆」
「アイリス・・・！」
ラサ様に強く抱きしめていただけるだけで・・・♪
「魂の刀は、帰るべき鞘に納まったのね・・・
きっと来世で・・・幸せになってね」

（ラサ戦記ＥＮＤ）

## ラサ戦記：エピローグ（後書き）

ラサ戦記完結です
感想・評価等頂けると幸いです
また、登場人物のイラストなども描いていただければ…なんてね☆
ご愛読有り難う御座いました♪

『ラサ戦記？キャスト』
ラサ：剣兵　２０代半ば
イメージカラー：黒髪＋赤
深紅の刀身を持つ『深紅の風クリムゾンウインド』所持
鞘は盾に仕込まれている
悪夢の呪いに蝕まれている

アイリス：万屋看板娘　１０代後半
イメージカラー：黒髪＋青
お淑やかな万屋看板娘。意外と積極的

ユキ：占い師　２０歳前後
ちょっと天然さんな占い師

リーム：飛兵　２０代前半
イメージカラー：金髪＋紫
アイザスの姫

ランテ：弓兵　２０代半ば
狩人。義勇軍の戦友

チャオ：弓兵　２０代前半
イメージカラー：茶髪＋青
傭兵。義勇軍の戦友

アイリスの父：万屋店主　中年
イメージカラー：白髪混じり＋茶
独善的な頑固親父

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5860s/

ラサ戦記

2011年5月4日02時34分発行